第７９号

会　報

一般社団法人　函館文化会

〒042-0955　函館市高丘町51番１号
学校法人野又学園 函館大学内
電話・FAX　(0138) ５７－１１７５
E-mail　bunkakai@host.or.jp
URL　http://hakodate-bunkakai.com/

平成29年度定時総会を開催　～事業報告・決算を承認～

一般社団法人函館文化会では、平成29年度定時総会を５月23日(火)午後１時30分からフォーポイントバイシェラトン函館において、会員総数106名のうち87名（委任状出席を含む）が出席し開催、提出された議案・報告は全て原案のとおり承認・了承し、終了いたしました。

以下、 定時総会の内容について、その概要をお知らせいたします。

定時総会は、金山正智会長の挨拶の後、定款の定めにより会長が議長となり議事に入りました。

今定時総会に付議された議案・報告は

議案第１　平成28年度事業報告について
議案第２　平成28年度収支決算及び監査報告について
報告第１　平成28年度収支補正予算について
報告第２　平成29年度事業計画について
報告第３　平成29年度収支予算について
報告第４　「講演会」の開催について

の６件で、議案第１、議案第２及び報告第１は関連があることから事務局から一括して説明、次いで監事から５月18

（↗次のページに）

函館文化会　会報　第79号　目次

平成29年度定時総会を開催 ～事業報告・決算を承認～ …… 1
会長挨拶　郷土の文化　会長　金山　正智 …… 2
函館文化会役員名簿（平成28年度定時総会選任） …… 3
平成29年函館文化会講演会開催案内 …… 3
平成28年神山茂賞　森本貞子氏に贈呈 …… 4
神山茂賞受賞記念講演・講演録
　函館近代史の輝かしさに魅せられて　ノンフィクション作家　森本　貞子 …… 4
北海道新聞・いさり火（掲載記事）
　より親しまれる神山茂賞に　金山　正智 …… 9
函館文化会講演会
　平成28年講演会・講演録
　　高松凌雲と箱館　日本近代文学会会員　櫻井　健治 …… 10
函館文化会ホームページ・ブログの開設 …… 13
函館文化会・市民公開講座
　第２回　北の食文化に灯をともして　㈱五島軒取締役社長　若山　直 …… 14
　第３回　生還した料理人　洞爺丸事故を語る　元調理師　秋保　榮 …… 18
卓　話
　第14回　講談と落語　講釈師　荒到　夢形 …… 21
特集　函館の歴史と文化を語り継ぐ②
　～テーマ「函館の坂道」～
　　立待岬へと続く「無名の坂道」　池上　信廣 …… 24
　　私と坂道　末永　玲子 …… 26
　　二十間坂の想い出　若山　直 …… 27
　　「懐かしの坂道」再訪記　平　昭世 …… 29
　　大三坂の想い出　高橋　勇 …… 30
特別寄稿　手話の源流の修道院手話　島津　彰 …… 32
函館文化会会員募集・助成制度 …… 34
会務報告
　平成28年度事業報告 …… 35
　平成28年度収支計算書 …… 37
函館文化会会員名簿（H29.10.１現在） …… 38
編集後記 …… 38

日実施した監査について「経理については正確かつ適正に行われており、また、事業も事業計画に基づき適正に行われていると認める」との監査結果の報告があり、審議の結果、いずれも満場一致で承認・了承されました。

なお、承認された平成28年度事業報告・収支決算については、別掲（35ページ）のとおりです。

従来、新年度の事業計画・収支予算は３月に臨時総会を開催し議決をしていたが、昨年の定時総会で定款を変更し理事会に委ねことに改められ、この度、３月14日の平成28年度第６回理事会で議決した平成29年度事業計画・収支予算について、報告第２及び報告第３として説明がありいずれも満場一致で了承されました。事業計画の主なものは、「神山茂賞の贈呈」を継続して実施、同日開催の「受賞者を祝う会」には多くの会員に参加を呼びかけ、会員交流の場にもすること、また、「函館文化会講演会」は、10月14日（土）函館市中央図書館において、函館市民映画館シネマアイリス代表の菅原和博氏を講師に「映画の街・函館」と題し開催予定、さらに２年目を迎える「市民公開講座」も郷土の歴史・文化に関する色々なジャンルの方々を講師に迎え、継続して実施することが報告されました。

会長挨拶

郷土の文化

一般社団法人 函館文化会　会 長　　金　山　正　智

テレビで放映されている京都の祇園祭山鉾の壮麗な巡行中継を見ながら、昨年訪ねた長浜曳山のことを思い起こした。

長浜曳山が行われている滋賀県長浜市は琵琶湖の北端にあり、豊臣秀長の城下町として知られている北国街道の要衝である。この地で念願の曳山博物館を訪れることができた。春の長浜曳山祭りには各まちの曳山の舞台で子供狂言（歌舞伎）が演じられるが、この博物館ではそれがいつでも体験できる。現物の曳山は漆仕立の見事なもので、想像を超えた大きさである。その舞台で演じられる子供狂言は、ここ長浜と石川県小松市が双璧といわれるが、子供たちの懸命な演技と観衆の声援がなんとも快い。

館長さんの話では、祭りに曳山をひくのは長浜だけのものではないようで、琵琶湖周辺、とりわけ湖の南東では、ほとんどの地域で祭りに山車が登場し、からくりや踊りなどが見世場になっている。写真では、多くが京都祇園祭りの山車と同じ形、様式になっていることに驚く。京都の文化の影響は並々のものではない。私は子供歌舞伎に魅かれて小松、長浜と辿ってきたが、逆に京都、近江、越前と結んでいくのが文化に関わる歴史の当たり前の流れなのであろう。

長浜のまちにとって、曳山祭りの伝統をつないでいくことは誇りと喜びではあるが、地域文化を継承することは簡単なことではないという。平成12年に曳山博物館が誕生してからでも曳山の維持管理、子供歌舞伎の技能向上、指導者の育成などなど関係者の苦労は絶えないらしい。そうした話の中で、函館の市川団四郎丈が長浜まで出向いて歌舞伎の初歩的な所作から演技指導まで懇切に指導されたことが随所に出る。このことを長浜の市民が今も徳としていることは、誠に嬉しいことであった。

先日、函館野外劇が今年も新しい形で公演を続けていることや、函館子供歌舞伎が新規の仕様で再開を図っていることが報じられた。双方とも30年の曲折を経て今日を迎えているが、関係の方々の新しい道を模索している懸命の思いが伝わってくる。火種を絶やさず、歴史を積み上げていく姿が、こよなく尊いものに思える。少しずつ変容していく函館のまちに添うように、函館の文化活動も動いていく。

平成29年度の函館文化会の活動がスタートしました。今年も会員の皆さんの繋がりを深めながら、新しい事業も加え、着実に活動を進めていきたいと考えております。お力添えをお願いいたします。

一般社団法人　函館文化会　役員名簿

（平成28年５月24日選任）

○顧　　問	安島　　進	○理　　事	池上信廣
			繪面和子
○会　　長	金山正智		小笠原　孝
○副 会 長	池見厚一		小笠原　愈
	平原康宏		小原幸男
○常務理事	叶　　邦武		櫻井健治

○理　　事	平　　昭世
	田村志朗
	三浦　　稔
	若山　　直
○監　　事	向出清治
	山田凉子

平成29年「函館文化会講演会」を開催します

～ 演題は「映画の街・函館」～

今年度も函館市中央図書館との共催で「函館文化会講演会」を次のとおり開催いたします。今回は函館市民映画館シネマアイリス代表　菅原　和博氏を講師にお招きして「映画の街・函館」と題しての講演です。

昨年開館20周年を迎えた函館市民映画館シネマアイリス。その代表を務める菅原和博氏は、平成20年（2008）に函館市出身の作家、佐藤泰志の小説と出会い映画化に取り組みました。市民による実行委員会を立ち上げ、市民・企業に協力を仰ぎ「海炭市叙景」を完成させましたが、この作品は、「新しい地方発信映画」として内外から高い評価を得て多くの支持を集め、その後、平成22年（2010）に「そこのみにて光り輝く」、平成28年（2016）「オーバー・フェンス」と佐藤泰志原作の３作品の映画化に深く携わってきました。

さらに今年、平成29年（2017）は新たにシネマアイリス開館20周年記念作品として、佐藤泰志原作「きみの鳥はうたえる」の映画化に取り組み、既に撮影を終え12月には完成させるなど、「映画の街・函館」の確立に向けての意欲を語ります。

会員皆さんはもとより、市民の方々にもお声がけをいただき、多数聴講くださいますようお願いいたします。

●**開催日時**　平成29年10月14日（土）
午後１時30分開演（午後１時開場）
終了予定　午後３時30分

●**会　　場**　函館市中央図書館　視聴覚ホール
（函館市五稜郭町26－１）

※事前の申し込みは不要です。直接会場にお越し下さい。
なお、中央図書館、保健センター駐車場を利用できますが、混雑することが予想されますので、公共交通機関でのご来館にご協力下さい。

●**演　　題**　「映画の街・函館」

●**講　　師**　函館市民映画館シネマアイリス代表
菅　原　和　博　氏

平成28年 神山茂賞

～ノンフィクション作家　森 本 貞 子 氏に贈呈～

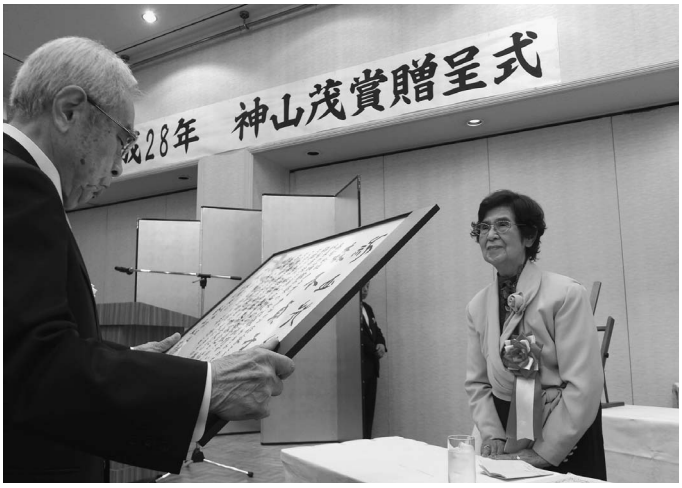
函館文化会では、平成28年「神山茂賞」を函館市出身のノンフィクション作家　森本　貞子氏（東京在住）に贈呈しました。

贈呈式は、故神山茂氏のご命日にあたる平成28年11月７日五島軒本店で行われ、贈呈式後、新たな試みとしての受賞者記念講演、引き続き受賞者を囲んでの祝賀会が開催されました。

「神山茂賞」を受賞されました森本貞子氏は、ノンフィクション作家として優れた業績を世に示しておりますが、特に注目したのは、高名な地震学者ジョン・ミルンと結婚した箱館の願乗寺住職の娘堀川トネの青春を描いた『女の海溝　トネ・ミルンの青春』と、箱館の網問屋秦家の三女として生まれ育ち、島崎藤村夫人となった冬子の生を描いた『冬の家　島崎藤村夫人冬子』です。

いずれも文学作品として高い評価を得ているが、郷土史研究の立場からこれらの作品やこれと関連する氏の郷土函館に対する多様な文化活動に注目し、評価されたものであります。

『女の海溝』では、未だよく理解されていない開港時から開拓使時代の箱館、幕末から明治初頭にかけて外国人が自由に往来し、活発な市民生活と交流する日本でも特異な国際的港町箱館の実態が、きわめて実証的な手法と広い客観的な視野で、先駆的に描かれております。また、『冬の家』では、特異な歴史と自然に育まれた自由で進取的な「箱館の女」の光と影、それに対比する日本的な家と家族の形が深く示唆的な視野で描かれており、これらの作品に払われた資料収集・調査の膨大な努力とその成果が、日本近代史の各方面に繋がる文献的な価値があるものとして、識者からも注目・評価されております。



また、氏はこれらの著作に加え、多くの随筆やエッセイ、講演活動などを通じて函館の特性、歴史などを紹介、郷土の歴史に対する市民の知識を拓き関心を高めており、これらによって郷土史研究への認識と視野が広げられる事への今日的な意義も期待されているところでもあります。

贈呈式の後、この度の「神山茂賞」の受賞を記念して森本氏の「函館近代史の輝かしさに魅せられて」と題して講演が行われましたが、講演録でその概要をご紹介いたします。

「神山茂賞」受賞記念講演・講演録（平成28年11月７日）

函館近代史の輝かしさに魅せられて

ノンフィクション作家　　森　本　貞　子

この度の「神山茂賞」受賞は満91歳の私にとりまして光栄の極みでございます。この賞をご制定くださいました関係者の皆様に厚くお礼申しあげます。受賞の感慨に浸りつつお話をさせていただきます。よろしくお願いいたします。

私、10代の頃よりこの函館の近代化を非常に敏感に感じておりまして、今回の受賞作となりました二作「女の海溝」

と「冬の家」を著作いたしました。私がこの本を書こうと思い立ちましたのも函館の素晴らしさに魅せられたからでございまして、まずは函館、函館、函館、その後に函館の女性がついてくるという考えでございました。しかし、一人の主婦の身でそれも戦前、戦中、戦後と言う非常に厳しい時代でしたから、私のような主婦が筆を執りますまでに18年もの歳月がかかりました。まぁー私なりに努力をしましたので、この「女の海溝」ができ上がるまでのお話を昔話として聞いていただければ、今回私の大変に幸せな思いをさせていただけると思います。

私は大正14年函館の青柳町の母の実家で生まれました。家はちょうど函館公園の真ん前でございました。二階から見ますと、函館港の全景が展望され、良港の美しさに東京からのお客さんは歓声を上げたほどです。ことに私の父が当時イギリスへの留学から南の港々を巡って帰ってきまして「この函館の港ほど素晴らしい港は少ない、なんと言ってもこの港があったからこそ外国貿易が盛んで文明の幸に浴したんだなぁー」と話したことが胸に刺っておりました。その頃の函館は海で働く男が多く長期に留守がちで女たちが家を護っており、また外国人の在留者と日本全国からの移住者が多かったものですから、お互いを理解するためにはっきりと物を言うなど、おしゃれで快活な女性が多くて、私の祖母や母も函館女の特色を備えておりました。また日常生活には西様式が溶け込んでいてバターやコーヒー、パン、クッキーなどが毎日のように食卓を楽しく彩っておりました。

５歳になりまして東京のど真ん中、上野の桜木町という所に移りました。その名の通り桜の美しい街で、近くの寛永寺には徳川将軍の墓がありまして、上野公園を散策すれば、ピアノの音が流れ、音楽学校、美術学校（現芸大）の生徒たちも行き交い、文化的雰囲気に包まれた町なのに、なぜか女性たちの表情は暗くて、話し声もひそやかなんです。函館女性とはおお違いで、函館のように近所にバターやパンを売る店もないんです。

やがて小学校に入りまして友だちや先生が「どこの生まれ」と聞きますから「北海道函館」って言いますと「えっ、アイヌと一緒に暮らしてたの？」とか「熊に襲われなかった？」って。そんな有様なんですよね。

昭和９年３月21日に函館大火がありました。私は毎年夏休みに懐かしくて帰っておりましたので、その年も帰りました。青柳町の家は焼けましたので豊川町に引っ越していました。ところが近くの廉売ではものすごい勢いで女の人が働いているんです。イガ、イガーと朝イカを売りに来るのも女の人が多かったです。女の人がいっぱい働いているんだなぁーという印象でした。それで東京に帰ってみますと、やはり何か田舎っぽい感じの雰囲気がございます。

それから私も女学校に入りましたけれども女学校でも同じでございまして、地理の時間に教わることはアイヌ、屯田兵、それから網走刑務所、牧場と言ったように十把一絡げにしてしまう。函館はもっともっとモダンな家がいっぱいあって西洋風の家もあったし、いろいろ西洋風な食べ物もあったのにどうしてかなと言う頭がありました。戦争がどんどん厳しくなりました。本を読みたくても読めないんです。本屋さんにはドミノ倒しのようにして本がなくなりましたので、女学校の本を片端から読みました。函館の本がないかなぁーと思うけれど、探しても全然ないんですね。英語がどんどん少なく教えられる、そして学校に行く時間になんと工場に行く、慰問袋を作るという厳しい時代に入りました。

昭和18年に卒業しました。私、昭和の年代と私の年齢とが同じなんです。卒業してしばらくしましたら、私の祖母と将来私の夫となる人の母親というのが仲が良くて、「末の息子が東大の地学を勉強しているので、なんとか結婚の話に乗ってくれないか」と祖母が言われ、それで一度逢っただけで結婚したんですけど…結婚の理由はとても話がおもしろかったんです。というのはお逢いしましたら「僕ね、地震研究所にもうじき移るかも知れないんだよ。今は地学をやっているんだ。地面から出てくる物は金、銀、鉄、マ

ンガン、石油…何から何まで…特におもしろいのは女性が好きな宝石まで出てくるんだよ。宝石だって日本で出るのは新潟の翡翠、山梨では水晶、珊瑚は海の中だけどね」また「万葉の里って知っているだろう。関西にあるのを。そこの二上山と言うところはなんと珍しいことに女の人の好きなガーネットという石が出るんだ。真っ赤な石でザクロの種に似ているから石榴石英語はガーネット。とてもきれいなんだよ。それは大昔の昔の昔火山が爆発したときに出来たんだ。結婚したら、お前にこの石で指輪を作ってやる」って言うんです。「エーッ」とびっくりしてしまって宝石の話をしてくれる男の人などいませんでしたから。もちろんそれだけで結婚した訳じゃないですよ。「地政学と言ってね、今地質学と政治学がね、戦争だってね、鉄だって石油だってなきゃあ困るだろう。だから地政学っていう学問が出来ている」「あらそう言えば地政学、学校の先生もそんな学問があるって言う話をしていたわ」っていうんで、この人と結婚したら、実は私大学は憧れだったんですけど行けなかったものですから、主人が大学で先生をしていればそういう話も聞けるし、おもしろい人だなぁーと思いました。私の方からは一つだけ、私はものすごく本を読んでいましたから「本を読んだり書いたりしてもいいですか」と訊いたら「そんなことあたり前よー」というからこれはいいなぁーと思って…。

森本貞子氏著作の一部

主人の母は、三重県の四日市から函館にお嫁に来た人で「四日市ではねぇ、女の人は全部着物を縫うんだよ」というので「あらまぁー」ってびっくりしまして主人に「着物の裁縫しなくちゃいけないの？」っていうと「あったり前だろう。そんなの本を読めばいいだろう」って言うことだったんです。それで主人に嫌われちゃ嫌だから花嫁全集十冊買ってきて、それで和装も洋装もなんとか縫えるようになりました。考えたら…四日市からお味噌からお醤油からお米からお正月には大きな伊勢エビも飾ってありました。私の父も福島の会津と言うところに長くおりましたが福島に私が行った時には、生活は成るものも成らぬものも全部右にならえなんですよ。皆さんこれを聞いて自分の家は違うという方がおるかも知れませんが、これが函館なんですよ。いろんな家があって故郷を引きずってくる。私共のように祖父が廻船問屋をやっていたりするとすごくモダンな生活をやっていたり…。

その頃、函館の豊川町の家に私が帰りますといろんな本がいっぱいありまして、祖母が読んでいたんだと思うんですよ。押し入れを開けるとザァーッと落ちてきた物は「婦人公論」なんですよ。源氏物語の訳が載っていたりしました。それが号によってピンク色や藤色に染められていてとても素敵なんですね。読んでいてすごく感銘を受けました。

ところで私の主人の仕事は地震でございまして、おもしろいことを言うんですよ。「地震はともかく地下の岩石が割れる、それが地震なんだ。ディープアース、ディープアース」っていうんですよね。「地球の深いところでそれが起こるんだ。お前な、岩石とかまぁ茶碗でもいいや、割ってごらん。割って同じにもう一度割ろうたって無理だろう？だから地震は難しいんだ」おもしろいことを言うなぁーとそんな生活をしておりました。

昭和38年、地震研究所にトワイ・クロスさんという方がいらっしゃいました。その方は「近代地震学の父」と称えられる英国人ジョン・ミルンの甥ごさんでしたが、「函館にミルンご夫妻のお墓がある」って言っているのを聞いて、主人はびっくりして「正式に函館の女の人と結婚しているんだそうだよ、知っているかね」と私に訊くけど私は全然知りません。「僕も地震学の父と言われるミルンさんのことは知っているけど、まさか函館の女の人と結婚していることは全然知らなかった」と言うから、私にすれば「函館の人だからモダンな人が多かったんだ」そう思ったんですね。「どうして知らなかったんだろう」って主人が言うものですから「そうよ、女学校時代に英語の授業はどんどん減らされて、授業はなかったしそれから英語の言葉を使うことは禁じられていて、イギリス人と結婚している女性の

人なんかっていうのは国賊扱いされていたに違いないから誰も言わなかったのよ。でも地震研究所にきっとなんか資料があるはずよ」って言いますと、そうしたらありました。当時はコピーがないから全部写真版です。その写真版を本のようにしているから、ゴワゴワしていてすごかったんですが、そこにちゃんと今村明恒先生という東大の先生が募金して函館に立派なお墓を建てたというのがあって、「あーやっぱり素晴らしいのは函館の女なんだなー」と私は痛切に感じました。ところが私の主人が「東京でいくらでも素敵な女の人が居るのに、なんだって函館の女なんぞと結婚したんだろう」とのたまうんですよ。それで私は「あーらあなた、私だって函館の女よ」って言いました。まぁ私の主人は東京の方ばっかし向いていて函館を知らないんだ。これは函館そのものと函館の女性についてなんとしても私は書かなきゃだめだと…だいたい本好きでしたからそんなことで猛烈に勉強しました。

まず、函館を知らなきゃいけないと言うんで取り組んだのが神山茂先生の函館市史。これでうんと教えられました。それから須藤隆仙先生や元木省吾先生のものなど、たくさん読んで函館図書館の岡田弘子様にはさんざんお世話になりました。北は札幌の道庁や北大の図書館、南は鹿児島市の図書館、東京では東大図書館、明治雑誌文庫、国会図書館。娘が大きくなりましたので主人が留守の時にまぁ２日ぐらいずつ徹底的に調べ上げて参りました。それでそんなときに、ベルツハナのことを書いていらっしゃる鹿島うめさんと助手の方に札幌の道庁でバッタリ逢ったのですが、なんとこの方トネさんのことを研究しているんだけれど、「《一生直らぬ脳の病》という診断書が出て来てどうしていいかわからない。明石信道先生とおっしゃってトネさんの甥御さんにも何回もお逢いしたけど、これがわからなくて困っちゃうんだよ。」って言うんですよ。でもそういえば私思い当たることがあるんですね。私の母は父とよく言い合いをしていましたから「お母さんどうして喧嘩ばかしするの」と言うと「喧嘩じゃありません。意見の交換をしているんです」って言うんですよね。そうして母が云うには、「この調子で会津に行ってしゃべくり回ったらね、会津の人からあの人少し頭おっかしいんじゃないかって言われたの」って言うんですよ。ですからこれだなぁーって私は思いました。だってミルンと結婚したトネはたいへん素晴らしい働きをしているんですよね。理由を調べましたところ、まず11歳で東京に上がって…これはやはり函館だから11歳で東京の学校、開拓使女学校に出すんですね。トネは函館の願乗寺の娘で幼い頃からブラキストン邸に出入りして片言の英語を話すようになっていましたし、お寺さんは京都にお弟子さんを出すから…。この両方が相まって11歳で出したと思うんです。親御さんも本人もすごいなぁーと思います。これが明治５年でございます。それから明治８年になるとこの学校が札幌に移転することになります。ところが札幌はまだ全くの原野です。ですからトネは高度な学問習得という希望が断たれてしまったと思い、学校を止めたくなります。函館の方がよほど文化が進んでいると考えたんですね。自分のように英語を片言でも話す人というのは当時の開拓使女学校にはいませんでしたから…それで札幌にいやいやながらいたら、ものすごい原野で、荒くれ男たちが学校を作り上げているけれども、夜になると遠くで山犬の声がする。恐ろしくて恐ろしくてノイローゼになり、もう函館に帰してくださいとまくし立てたと思うんですよ役人に。だから役人さんがそういうふうに診断書を添えて帰したと思うんです。明治８年にトネは函館に帰ってくるんですけど、この学校は、明治９年に女学校だけ閉校になっているんです。開拓使学校の男子の方は今の北大になっているわけですね。ですから嫌だと感じたトネの方が私は正しかったと思うんです。そういうふうに私は解釈いたしました。

講演中の森本貞子氏

「女の海溝」を書き出すのが私の51歳の時でございまして52歳から２年間かかって仕上げました。どうやって書い

ていいかわからないので谷崎潤一郎、伊藤整、宇野千代の文章読本を読んで勉強して、好きな文をみんな分解して勉強したのですけれど長くかかったのは以上のようなわけです。私の本が文藝春秋社から出まして、素人が書きました物としては７千部がたちまち売れまして、その翌年にはまた３千部出して、全部で１万部売れました。その後、五稜郭タワーさんが又出してくださって私にはうれしい限りでございます。

話はすっと飛びまして一昨昨年になりますか、地震学会の会長の加藤先生から、東京上野科学博物館でミルン没後百年記念祭をやるので、天皇・皇后様からのご質問に答えてくれということで、大変光栄なことだと存じまして引き受けました。天皇・皇后様が全部見終わられ最後に私のところに来られまして質問されました。「協力したと言うけれど、いったい何ですか」と天皇がおっしゃったんで「函館の女性とこの近代地震学の父と言われる方がご結婚されまして、函館というところはとても文化が進んでいる所だったので、ミルンさんと気が合ったんだと思います」と言って函館を宣伝しました。皇后様には「それはいつのことですか」と訊かれましたので「1860年から1925年のことでございます」と答えました。その他２、３そういうお話をさせていただきまして、私とても光栄に感じました。というのは、函館のことについて皆さん関心を持って下さる、函館の女性についてこれだけ関心をもってくださることは私にとってとても嬉しいことでした。

同じ年にミルンとトネ夫人の家があるイギリスのワイト島に行きました。ミルンのお墓が島中央のニューポートという街の教会にあり大々的な没後祭をやると言うことで、カーリスブルック城の二階全部がミルンとトネ夫人の展覧会場になっていて、ミルンの命日８月31日の前後３日間無料で観覧出来るということでした。ロンドンからポーツマスへ、そしてすごく立派な連絡船に乗り、20分でワイト島のライドと言うところに着きます。ワイト島は日本で言うと淡路島よりも少し大きいくらいの所です。私の存じ上げている方が私たちが行くことをちゃんと知らせて下さっておりましたので、ものすごい歓迎をうけ、一番偉い牧師様が門の外まで出迎えて下さいました。それで片言のお話をすると同時に私の書いたミルンとトネ夫人の本を差し上げました。200人くらい集まっていらっしゃいましたかしら、式の始まる前にその本と持って行った日本の干菓子をみなさんにお見せになって、「函館の女性とミルンが結婚したんだ」とお話下さいました。１時間にわたるミサでしたけれど、とても丁寧でその荘厳さが素晴らしく、またソプラノ歌手の方が賛歌を歌って下さいました。牧師様が本を掲げたときに隣にいらっしゃる方が大きな拍手を私に下さいましたので、式の後に「失礼ですがどちらからいらっしゃいましたか」と訊きましたら「オックスフォードからだ」と。オックスフォード大学の大きな教室の先生だったんですね。「ご専門はなんでいらっしゃいますか」と訊きましたら「ディープアース」って言ったんで、私、とてもうれしかったんです。というのは、18歳、初めて主人と会ったときに主人が「ディープアースを研究している」と言ってましたから「あらっ、同じことだ」と思いすごい感激でした。その後ミルンのお墓に行き、ピンク色のお墓でものすごくきれいで、そこで十字を切って花束を捧げた後、大勢の方が集まっていらっしゃいますから「此処にお墓がありますが、函館にもミルンのお墓があるんです。ミルンの奥様のトネはここからお帰りになって函館に住んだ後亡くなって函館にお墓があります。どうか皆様、日本においでになりましたら、函館、ご存じですか。北海道の南端でとても素敵な夜景の街です。どうか皆様函館にいらして下さい。函館は素晴らしい街なんです。函館の女の人も素晴らしいんです。」と申し上げたら大きな拍手をいただきました。

ディープアースといい、その大きな拍手といい私はとてもうれしゅうございました。こんなたわいない私の経験をお聞き下さいまして、本当にありがとうございました。

若柳英美代社中のみなさんによる祝の舞

より親しまれる神山茂賞に

郷土史研究の裾野拡大に期待

函館文化会会長　金山　正智

いさり火

函館の歴史・文化の普及活動を行う函館文化会は11月7日、郷土史研究で優れた実績を持つ個人や団体を表彰する今年の神山茂賞を函館市出身でノンフィクション作家の森本貞子氏(91)＝東京在住＝に贈った。幕末・明治期に函館で暮らした実在の女性の生きざまを描いた作品で、綿密な時代考証が高く評価され、神山茂賞として初めて郷土史研究家・団体以外の受賞者となった。この受賞をきっかけに神山茂賞自体はもとより、郷土史研究への理解が広がっていくことを期待している。

神山茂賞は、郷土史家神山茂氏の事績にちなみ、函館文化会が1989年に創設。昨年までに、25人と8団体に贈ってきた。

森本氏は25年、函館市生まれ。当時の市民生活や北海道開拓使、雇い外国人の活動など史実を踏まえて、幕末・明治初期の箱館で生きた女性を描いた「女の海溝　トネ・ミルンの青春」(81年)、「冬の家　島崎藤村夫人冬子」(87年)を執筆した。描写力など作品のレベルの高さはもちろん、文筆活動にあふれる郷土函館への深い思いも評価の対象になった。

「女の海溝」には開港時の箱館を舞台に願乗寺住職の娘トネがイギリスの地質学者ジョン・ミルンと出会い結婚、後にイギリスに渡って活躍する波乱に富んだ生涯がつづられている。トネの苦悩や感情を表現するため、文体こそ小説風だが、登場人物は全て実在の人物。史実は直接古書に当たるか証言を得て、自身の考証によって書いたという。

■□■

実は、森本氏が候補者に挙げられた段階で、私には気がかりなことがあった。

これまでの受賞者の実績と森本氏のノンフィクションの著作活動は、同じ評価軸に位置づけられないかもしれず、郷土史研究の範ちゅうに入らないとして選考委員会の議論の場に上ることもなく、振り落とされるのではないかと懸念した。

ふたを開けてみると選考委員会は真摯な議論を重ねた上、全員一致で森本氏を受賞者に推した。

2005年に函館市文化賞を受賞した文芸評論家の安東璋二選考委員長は、委員会報告の中で史実を掘り下げる実証的手法や文化史文献としての価値を評価するだけではなく、随筆や講演などの活動を通じて、函館の歴史や女性の気質などについて積極的に語っていることなど、森本氏の「郷土愛の強さ」も選考理由に挙げた。

■□■

森本氏の受賞で、今後、受賞対象者の多様性が着目され、範囲が拡大される可能性が生まれた。神山茂賞が、より広い住民の皆さんに親しまれるものになると期待している。

小学校教師を経て、調査・研究活動に入った神山氏を代表する著作に「函館教育史」がある。幕末からの函館の教育の歩みが克明につづられ、自らが心血を注いできた函館の教育に対する愛着と誇りに満ち満ちている。

神山氏が後世に伝えようとしたもの、そして、私たち函館文化会がこれまで28年間にわたって継承してきた神山茂賞の精神を改めて大切にしたいと心を引き締めている。

森本貞子氏の受賞記念講演＝11月7日、五島軒本店

平成28年11月13日付　北海道新聞

平成28年度 函館文化会講演会

『高松凌雲と箱館』を演題に開催されました

函館文化会では、平成28年10月15日（土）函館市中央図書館視聴覚ホールにおいて「函館文化会講演会」を開催いたしました。本講演会は、文化振興事業の一環として函館市中央図書館との共催で毎年行われているもので、この度は日本近代文学会会員　櫻井　健治氏を講師に「高松凌雲と箱館」と題し行われました。

櫻井氏の講演は、「近代国家夜明けの舞台となった箱館の地で、潮の香りをかぎながら、医学はもとより後世に様々な形でインパクトを与えることになった人間高松凌雲の人生の一端に視点をあててみたい」との話しから始まり、箱館戦争で敵味方の区別なく負傷者の治療に努め、赤十字活動の先駆けとなった足跡を、文献などを交えて解説して下さいました。

また、凌雲が負傷者を治療した当時の医療器具が今も市立函館博物館に保管展示されていることや、凌雲に限らず後世の日本にさまざまな影響を与える重要な人たちがいたことも忘れてはならないと紹介、凌雲没後100年の節目の年に、来場された約80人の市民の方々にとって意義深い講演会となりました。

なお、今回の櫻井氏の講演内容については、要約されたものになりますが纏めていただきました。今一度講演会当時を思い起こし、ご一読いただければと存じます。

平成28年講演会・講演録（平成28年10月15日）

高 松 凌 雲 と 箱 館

日本近代文学会会員　　櫻　井　健　治

本日は「高松凌雲と箱館」が演題ですが、高松凌雲を語る前に、凌雲との関わりで欠くことの出来ない箱館戦争の大筋について把握していただきたく、話を進めてまいたい。

今年は戊辰戦争最後の戦いとなった箱館戦争が終結して148年目にあたる。慶応３年（1867）10月に徳川慶喜は朝廷に大政を奉還し、12月には王政復古の大号令が発せられ、徳川幕府は瓦解した。慶応４年には、新政府より一方的な領地返納を求められた旧幕府側の反発により、鳥羽・伏見の戦いに端を発する戊辰戦争が勃発し、全国各地にその跡を残すことになった。

・東京上野寛永寺を舞台とした上野戦争
・新潟の長岡城を中心に展開された北越戦争
・白虎隊で有名な会津若松の戦いをはじめとする東北各地での東北戦争

そして箱館戦争は、各地で展開された戦いの最後の地となったのである。

旧幕府海軍副総裁の榎本武揚は、慶応４年８月19日夜、軍艦開陽丸以下旧幕府軍艦８隻を率いて品川沖から脱走。仙台で北関東・東北を転戦していた新選組などの諸隊と旧幕府軍兵士を乗船させ、既に元号が明治に変わった10月20日、蝦夷地鷲の木（現森町）に上陸した。

榎本の目的は、新政府の下で徳川家を中心とした士族による蝦夷地の開拓と防衛であった。上陸の趣旨を携え、大鳥圭介と土方歳三が部隊を率い函館に出発し、10月22日、途中待ち伏せしていた箱館府兵、福山・大野・津軽・松前藩の兵士達と戦い、旧幕府軍が圧勝した。峠下、大野、川汲で全軍潰走との知らせを受けた箱館府知事の清水谷公考は、25日未明に軍艦陽春で青森に逃れ、26日旧幕府軍は無人となった五稜郭を占拠したのである。

27日に五稜郭を出発した土方歳三率いる700名の旧幕府軍は、半月ほどで松前、江差を制圧し、12月に蝦夷地領有宣言式を執行した。

しかし、新政府軍は、雪どけを待ち圧倒的な兵力を持って反撃を開始する。明治２年（1869）４月９日、乙部に上陸し三方から箱館に向けて進撃を開始、新鋭艦甲鉄によって制海権を掌握した。17日松前の福山城を奪還、さらに要衝の茂辺地、矢不来を制し、５月11日には箱館の旧幕府軍に箱館山からの奇襲上陸作戦を決行するなど、陸海両面作戦による箱館総攻撃であった。

この日、元新選組副長であった土方歳三が戦死し、旧幕府軍艦隊も壊滅した。新政府軍の総参謀黒田了介は、土方歳三が死んだことで「これで蝦夷の戦いは終わった」と言ったという。５月15日には、新選組などが守備していた弁天岬台場が降伏、翌16日には降伏勧告を受け入れなかった千代ヶ岱陣屋で最後の戦いがあり、守将中島三郎助父子が戦死し、５月18日、遂に旧幕府軍は降伏開城する。これをもって戊辰戦争は終結したのである。

さて、今日のテーマである高松凌雲は、天保７年（1836）12月25日、筑後国御原郡古飯村（現在の福岡県小郡市）に誕生した。父の高松与吉直吉は、古飯村の庄屋であり、男６人、女６人の12人兄弟の三男坊が凌雲で、幼名を権平、後に荘三郎と名乗ったが、ここでは凌雲の名で統一する。

父親が凌雲に教えた教訓は、「不撓不屈」「独立独行」の精神を培うことであった。凌雲は作男と共に農耕に従事し、17歳迎え岩田村の庄屋秋山要助が、北方一里先の力武村の庄屋候補に推し、見習いのため秋山家に住み込ませた。しかし、庄屋として生涯を過ごすことに不満を抱いた凌雲は、20歳で久留米藩家老の家臣川原弥兵衛の養子となり、武術を修め漢書に親しんで家老の書生になった。

凌雲の父親が厳格な人間であったのに対し、川原家には

高　松　凌　雲

規律がなく経済面でもだらしないところが多く、凌雲は養家にいたたまれない様な嫌悪感をもつようになった。その頃、凌雲より３歳年上の次兄勝次は、医師を志して江戸で勉学に励んでいたことから、彼も兄にならおうと考え、衣類を質に入れし５両の金を手にして川原家を出奔した。安政６年（1859）４月８日のことであった。この年は、箱館・横浜・長崎が海外に門戸を開いた年でもある。

一度故郷の古飯村に戻った凌雲は、４月29日再び江戸に到着した。兄勝次は江戸で極貧にあえぎながらも漢学、算術、蘭学を学び、その誠実さと精勤ぶりに感嘆した旗本の川勝広栄は、自分の屋敷に住まわせることにした。さらに御家人の古屋久左ェ門が長女せいの婿養子を求めていることを知り、勝次を推薦し、養子縁組をさせて、名前も勝次から鐘之介と改めた。

鐘之介が養子縁組したばかりの所へ、弟凌雲が頼ってやってきたことから、鐘之介は弟を故郷の知人と偽って馬喰町の旅籠に連れて行こうとしたが、養母は２人が兄弟であることを見抜き、古屋家に寄食させることとした。

安政６年５月、凌雲は木挽町１丁目の小児科医柴田方庵の通い書生となったが、柴田が書生達に医学を教えることに不熱心なことに失望し、８月神田三河町３丁目の医師石川桜所の門に入り、書生として住み込んだ。石川は著名な蘭方医であり、門下生の教育にも熱心で凌雲も蘭書を読み、本格的にオランダ医学の勉学に励むことになった。

文久元年（1861）、凌雲は石川桜所の許しを得て、天下の大蘭方医緒方洪庵の敵々斎塾に入門し、郷里の父親に頼んで毎月１両を送ってもらい、塾費として納入した。塾には全国から優秀な人材が集まって来ていたが、凌雲はたち

まち頭角を現し、オランダ語も自由に読み書きし、西欧医学の知識も一段と豊かになっていった。しかし翌年8月、緒方洪庵は幕府に召されて江戸に行き、奥医師兼西洋医学所頭取となったため、敵々斎塾は閉鎖された。

慶応元年（1864）5月、凌雲は第二次長州征伐の将軍徳川家茂に随行する石川桜所に従って京都に向かった。この京行きが凌雲の身に一大転機をもたらすことになった。一橋家では凌雲の学才を高く評価し、表医師として招き、10月には御医師並、翌年8月には奥詰医師に任命した。まさにトントン拍子の栄進である。

慶応3年（1867）4月、フランスのパリで万国博覧会の開催が決まっており、慶喜の弟昭武を派遣することとしたが、その際幕府外交団の一員として凌雲を同行させることにした。この外遊が凌雲を大きく成長させることになる。フランスでは、箱館と極めて縁の深い元奥詰医師であった栗本鋤雲との出会いがある。鋤雲は、安政5年（1858）箱館にやってきて居を構い、投薬、七飯町で薬草園を経営、病院の建設、久根別川の通運、養蚕などの事業を興し、数々の業績をあげた人物である。奥詰医師であった鋤雲は、文久2年（1862）に幕府の特命で、職名を医籍から士籍に改め箱館奉行詰めとなり、幕士として樺太に駐在し、冬季越年まで経験している。

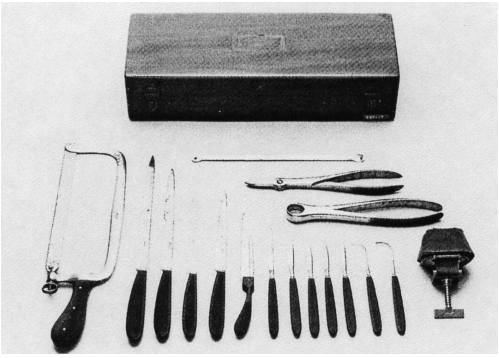
文久3年に江戸に戻され、昌平黌の頭取となり、慶応元年には軍艦奉行、翌年外国奉行と箱館奉行を兼任するが、慶応3年に急遽フランス行きの特使として日本を出発し、フランスに滞在した。この時期、凌雲は鋤雲から様々な指導を受け、勉学に力を注ぐと共に友人から金を借りて、顕微鏡や外科器具等を購入した。なお、これらの器具類は現在市立函館博物館に収蔵展示されている。

慶応4年1月、日本では薩摩・長州両藩兵と幕府軍の間で戦闘が起こり、幕府軍は大敗して徳川慶喜は大阪城を脱出して江戸に逃れたとの情報が、フランス滞在の鋤雲のもとに届けられ、鋤雲、凌雲をはじめとする関係者は急遽帰国の途につくことになった。凌雲は渡仏するまで一橋家の奥詰医師であったことから、帰国後も謹慎中の慶喜のもとで仕えようと願っていたが、その願いは叶わなかった。凌雲は、旧幕臣として幕府を再興すべく、官軍に抵抗するため榎本武揚率いる旧幕府軍の砦箱館へと向かい、医師としてその力量を発揮することにした。

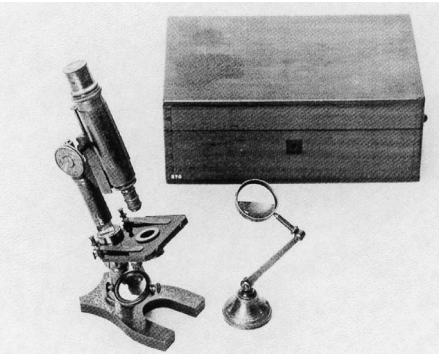
医師凌雲の哲学は、彼の手記「東走始末」に詳しく書かれているが、明治2年2月には新しい病院も完成し、負傷者の治療を一通り終えることが出来た。しかし、3月の宮古湾の戦いで多くの死傷者が出たことから、高龍寺を分院として使用した。戦況は、旧幕府軍にとって次第に不利となり、食糧や薬品も続かず、凌雲は早晩新政府軍に捕縛され、死に勝る恥を受けることになると考え、病人と死生を共にする覚悟を決めた。

この時凌雲にとって忘れ去ることの出来ない大切なことは、「欧州では負傷して戦闘力のない者は、彼我の区別なくお互いに治療する」ことを見てきたことであった。危機の迫る中で凌雲は、負傷者の心を鎮めるため、ロシア領事に病院保護を依頼し、承諾を得た。明治2年5月4日から11日に亘る箱館海戦は、実質的に旧幕府軍が倒れる大きな要因となる戦いとなり、緊迫する病院が新政府軍に改められたことから、新政府軍に対し、次のことを陳述した。

- 自分は医師であり、ここにいる者は新政府軍と交戦して負傷した者であること。
- 今は病床にあって、起居の動作も自由にならない状態であること。
- 回復したら、いかなる厳刑に処せられてもよいが、それ



手術道具－フランス製（市立函館博物館蔵）



顕微鏡（市立函館博物館蔵）

までは助命してもらいたいこと。

・自分はそのことを申し述べるため、新政府軍の諸君の来るのを待っていたこと。

医師凌雲のこのような誠心誠意の対応に対し、耳を貸さない者もいたが、薩州隊の兵士山下善次郎は、進み出て次のように回答した。

・申し出の儀は承知した。病人は必ず助命されるであろうこと。

・降伏すれば、等しく皇国の民であって安心してよいこと。

・健全な医師達の処分は、医師がいなければ病人の助命もその甲斐がないため、一層注意して診療にあたること。

こうして凌雲は、敵・味方の差別のない平等・公平な病人に対する取扱いは、我が国赤十字精神の発露となった。5月22日、凌雲ら旧幕府軍医療チームは、箱館病院を新政府軍大病院に引き渡し、重病人であった81名の患者を江戸に送り返すため、8月17日江戸へ向かった。

江戸に戻った凌雲は、フランスで学んだ医者としての哲学を忘れることなく、救療活動に従事し、明治12年（1879）2月に医師団体「同愛社」を設立した。さらに大正12年(1913)、社会福祉や医療面での功績が認められ、藍綬褒章を受章、大正5年10月12日、81歳で逝去した。

凌雲の葬儀は、10月15日に同愛社社葬として谷中斎場で営まれたが、この日は朝から時折パラついていた小雨が、葬儀半ばになって沛然となり、風も起こって樹木の枝は激しく揺れ和傘や洋傘を差していた会葬者が長い列を作り、それは雨で白く煙っていたという。

結びに、高松凌雲が徳川慶喜をどれほど尊敬していたのか。彼の思いを綴った一文から紹介しておこう。

「至誠一貫の大英断の結果によりて、王政復古を容易ならしめ、幕府数百年の終わりを全うさせられしは、実に平凡人の成すべき業にあらず。その当時、もし慶喜公の誠意なく、狼狽激昂して、一歩方針を誤まらば、江戸城は言うまでもなく、市中もまた戦場の街なり。のべて各藩に波及し、全国乱れて元亀天正の二の舞を演じ、国家衰微して遂には外国人の犯す所となり。しかも計り知るべからず。慶喜公は、東照宮に劣らざる治国平定の神人なり。国家の大恩人なり。ことに政権を離れてより数年間隠遁して世事に関せず。その一貫の至誠、実に欽迎すべきである。」

高松凌雲と家族

函館文化会「ホームページ」、「ブログ」の開設

インターネットの普及により、企業・団体等がホームページを持っていることが当たり前になっており、「函館文化会」に対する信頼度を向上していくには、会員を含めたユーザーの求める情報を常に発信していくことが必要です。

こうした中で「函館文化会」の知名度の向上と活動の推進のため、函館文化会の歴史や概要、事業の内容及び案内、報告などの情報を、インターネットを通じて全国・世界に発信することを目的に平成29年4月1日から函館文化会「ホームページ」、「ブログ」を開設いたしました。一度ご覧いただき、ご感想・ご要望など事務局にお寄せください。

アドレスは、次のとおりです。

・ホームページ　http://hakodate-bunkakai.com/

・ブ　ロ　グ　http://blog.livedoor.jp/bunkakai/

函館文化会 市民公開講座

函館文化会では、郷土の歴史・文化などを学び、探究しながら、受け継がれてきた「郷土の文化」を後世に継承することを目的に「市民公開講座」を開講しております。

今年は、３月と９月に２回の「市民公開講座」を開催しましたが、いずれも募集人数を超えての受講申込があり、また、講座を担当した講師の興味深い話しに受講された皆さんから好評を博しておりました。

なお、２回の市民公開講座の内容について、講演録で概要をまとめましたのでご紹介します。

第２回市民公開講座（平成29年３月14日）

北の食文化に灯をともして

㈱五島軒取締役社長　若　山　　直

本日は卓上にレジメを配布させて戴きました。

「北の食文化に灯をともして」と題して、五島軒の明治12年（1879）から138年分のお話をさせてもらい、その後に、創業以来のメニューであるカレーライスを召し上がって戴きます。

まず、レジメの写真についてです。明治40年８月のホテルを経営していた当時のもので、その後ホテルは大火で消失してしまいましたが、旅館が全盛の時代には珍しいホテルとして営業しておりました。一階はレストラン、２階が宴会場、３階に宿泊できる部屋があったというもので、現在のようなホテルではありませんでした。ちなみに五島軒は４回大火で焼けています。明治12年、明治19年、明治40年、そして昭和９年。昭和９年の大火は消失家屋２千軒以上、死者２千名以上という大火災でした。その下の写真は、昭和９年の大火の後、現在地に新築し、現在に至っている五島軒の外観です。札幌の歴史資料館とともに国の登録有形文化財となっております。大火の後の復興には大量の木材が必要で、当然ながら市役所などの公共施設が優先されます。民間の建物には優先順位が付けられました。たまたま日米野球函館大会が予定されており、その大会のあとの晩餐会の予約が入っていたことから、五島軒は早い段階で復興することができたのです。幸運でした。皆さんが座っているこの部屋「王朝の間」では、ベーブルースや沢村栄治が食事をしましたし、天皇陛下も昼食をおとりになっています。天井を見上げて下さい。アーチ型になっていますね、天井の材質はツンドラ材です。まだマイクがない時代で、私の立っている場所から突き当りの壁際まで、肉声が通る必要がありました。素材が堅すぎると声が反響し、柔らかすぎると声を吸収して聞こえなくなる。当時、東京大学の教授と日商岩井の技術者が共同研究の末、見つけたのがこのツンドラ材でした。ツンドラ地帯ではコケや落ち葉が堆積して化石になります。地面から数メートル下に、石より柔らかいが、土より硬い層があり、これが音響材に最適であることと発見したのです。今は新建材が安く出回っていますが、当時、ツンドラ材は最新の音響材だったのです。掘り出した場所は、今はロシア領になっている樺太です。

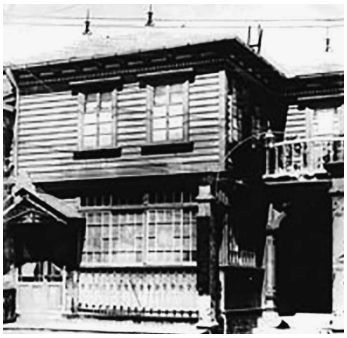
平成10年、五島軒に隣接していた倉庫から火が出て、本店が類焼しました。

ＮＨＫは函館山山頂からのテレビカメラで「今放映しているのは、函館の五島軒が炎上中の生映像です」と全国放送をした。炎が800ｍも立ち上がっていたので、全焼したと思われたのも無理なかった。本館の外壁は石ですから焼けなかったが、炎は石壁伝えに屋根と天井の隙間から侵入しました。消防隊は屋根に穴をあけ、６トンもの水を注水して火は鎮火した。でも電気系統、冷暖房設備は完全にやられた。立ち会っていた建設会社の積算では「取り壊して再建すれば１億程度でできる」という。翌日、文化庁の担当者が来て、「まさか取り壊すことはないでしょうね、すでに文化財保護法で補助金を出しているが、これは不慮の類焼なので、再度同額の６百万を出す手続きを進めたい」と言った。社長としてはリフォームで切り抜けたいと思っていたので費用を積算すると、総経費は１億５千万。火災では一階が燃えれば全額補償されるが、被害は２階と電気・水道・冷暖房の破損のみなので満額はでない。結局、火災保険で９千万、残りは借金することになりました。例えば、２階部分のステンドグラスのはまった壁面修理は、ガラス窓としては百万ほどの査定です。しかし、120年も前のステンドグラスを修復するには大変な手間が必要でした。図柄は「３人の女神が山海珍味でお客をもてなす」というもので、カラーガラスが大小５百ピースはめ込まれている。札幌の職人が名古屋のガラス貯蔵庫に出張し、同じ色のものを集め、不足は海外から調達して半年ほどで復元できました。ちなみにステンドグラスの修復費用は１千万円でした。火が完全に鎮火したのは深夜でした。翌朝、旭ヶ岡の老人ホームに入居していた父に電話しました。駆けつけてきた父は、ドロ沼のような王朝の間に入ると、私の肩を叩いて言いました。「良かったなあ、今までの火事のなかで一番軽い。誰も怪我一つしなかったのは幸運だった。社長、頑張ろうな！」

さて、現在の五島軒はカレーライスの店として有名になりました。

それでテレビや新聞の取材を受けることが多い。そのきっかけは天皇陛下のエピソードです。

陛下が行幸啓される前年、ハマナス国体の為に皇太子がご来函された際、お土産を選ばれましたが、その中に五島軒のカレー缶詰も含まれていました。それを召し上がった天皇陛下はご子息に「昼食会場が五島軒なら、献立にカレーが出るのだろうか？」と聞かれたそうです。そこで宮内庁



末広町の現在地に、新店舗を新築移転　明治40年８月

現在地に一部３階、地下１階の本店を新築　昭和10年９月

の侍従から私に問い合わせの電話がありました。実は、私は「函館豆記者交歓会・会長」として子供たちを引率して東宮御所を訪問した際、侍従と名刺交換していたのです。献立はすでにフランス料理に決定していました。サラダの葉っぱ一枚まで保健所で検査済みでした。正面玄関前のマンホールの蓋には、念入りに開かないように工事する厳しさだったので、到底無理ではないかと思いました。でも、保健所としてもご希望には応じたい。「温めて出すカレーなら大丈夫だろう」ということで許可が下り、当日はメインデッシュとして「鴨カレー」をお出しすることができました。「やはり缶詰よりも美味しい」とお慶び戴いたのですが、問題は店内の案内を父が行ったことです。五島軒の最高責任者は徳次郎会長である、ということで案内役を仰せつかったこともあり、本人はやる気満々。時間制限などすっかり忘れて質問に答えました。お二人を資料室にあったイタリア製の椅子、恋人が互い違いに座ってキスしあうようにできている椅子に案内し、「お座りになりますか？」と聞いた。陛下は、「では」と美智子妃殿下と座られて大満足。鉄のストーブの前では「当時の暖房として、石炭ストーブは珍しかったでしょうね？」と質問された。「そうなのです。五島軒が大火で焼けても商売ができたのは、オーブンを兼ねた厨房のストーブのおかげです。火災現場に残るストーブでパンを焼き、休業せずに商いを致しました」

「そうですか、店の恩人なのですね、このストーブは」と美智子妃殿下。あまりに説明が長いので、おつきの侍従長が飛んできた。「社長、予定を大幅に超過している。会長さんを止めて下さい」と言う。父の袖を引くと、小声で、「ご夫妻の笑顔を見なさい、私は質問されたことに答えているだけだ」とやめなかった。侍従長の心配はあったが、陛下は本当に満足したご様子で、赤い絨毯を敷いた階段を、互いに手を取り合って登られた。その姿はあまりにも自然で、一服の絵になっていました。

五島軒の初代、若山惣太郎は江戸時代、銀座近くの蠣殻町で米問屋をしていた人です。

五島軒にある資料室「蘆火野記念ホール」

2代目の若山徳次郎は東京の帝国ホテルで修行した調理人でした。3代目が父の若山徳次郎ですが、父が徳次郎という名前になったのには理由があります。若山家は代々酒豪の家柄で、初代も2代目も飲みだすと2升は飲んだ。それが原因だったのでしょう、2人とも60歳で心筋梗塞、脳梗塞で倒れています。2代目が心臓発作をおこして神田の駅頭で倒れたとき、学生だった父は2代目の手をとり、遺体を函館に搬送しています。22歳の父が家督を継ぐ際、母親は父を自宅の仏壇の前に座らせ、「お前は私が死ぬまで、一滴の酒も飲んではならない」と言い渡したのです。父はこの約束を守り、母親が75歳で亡くなるまで酒を飲みませんでした。母親が亡くなったとき父は45歳になっていました。ですから、大門、五稜郭のスナックを飲み歩くようになったのは45歳からで、これは90歳まで続きました。酩酊したのは見たことがないほど酒は強かったが、自宅では晩酌はしない人でした。人間は一生に飲む酒の量はほぼ決まっているという学説があると言います。これは正しいのかもしれません。仏間での約束の際、父は本名・勇から、3代目徳次郎に襲名しました。2代目と親しかった函館税務署長が「五島軒は若山徳次郎の名で通っている。それに、襲名すれば印鑑登録の変更も不要、遺産相続も、契約書の変更もやりやすい」と教えてくれたからです。確かに22歳の勇（ゆう）では知名度はない。たまに「直さんも襲名するのでしょう？」と言われることがあるが、初代の曾祖父は若山惣太郎、その子、2代目の祖父は徳次郎。襲名してはいません。3代目の父だけが、勇から徳次郎に襲名した。それは今説明したように父親の急死が理由だったからで、私が襲名する理由はないわけです。

3代目の父が亡くなって5年がたちます。

4代目の私の悩みの一つは、父が集めた膨大な蔵書です。本店の会長室に数千冊、自宅の書庫に数千冊、これで足りずに寝室に千冊。会長室は地下にあるが、自宅の蔵書は2階だから、ビー玉が部屋の隅まで転がるほど傾斜していて梁の補強が必要になったのどです。なぜこれほどの本を集めたのか？それは「五島軒の100周年史」を書くつもりだったからです。父は五島軒や、函館の「消された歴史」についてもっぱら人に語るだけで人生を終えたのですが、代わりに小説家である船山馨さんが、小説『蘆火野』（あしびの）を書いてくれた。父は惜しみなく資料、書籍を送ったようです。この小説の末尾には、「準之助とおゆきの青春を秘めた函館・基坂下の雪河亭は、現在、寛から数えて3代目に当たる。人目に立たない仕舞屋のようなつつましい店構えではあるが、“味は飛び切り、値段は手ごろ”という準之助の夢は、店の名前とともに今も生きている」と記されています。本の帯には、「今秋10月、森繁久弥主演で帝劇舞台化。明治維新を彩った函館・五稜郭から、革命の歌声響くパリへ……コック修行に励む若い二人の愛は世界史の渦中を駆け抜ける。河出書房新社」とある。『蘆火野』は朝日新聞に連載された後に出版され、帝劇でも舞台化されたのですが、客入りが良かったため、3年目に再度舞台化されました。父は「蘆火野観劇ツアー」を募り、私も長男を連れて参加しました。宿泊は帝国ホテル。このころが父の一番幸せなころで、これ以降、著書など書くよりも、もっぱら「語り部」になったのです。語るのには相手がいる。相手が面白がってくれれば興が乗る。特にスナックのママさんなどは長居をしても喜んで（本心か否かは別とし

て）くれる。性格からして父は「書く人」ではなかったのです。帝劇の舞台では、主人公の河井準之助が西郷輝彦、おゆきは遥くらら、準之助の父は森繁久弥、その情夫は淡路恵子、水谷良重。竹脇無我や松山英太郎なども出演する豪華な俳優陣でした。舞台で、フランスに渡る主人公に箱館諸術調所の恩師武田所長が言う。「日本はこれから嵐になる。かつてない嵐だろう。それに巻き込まれたもうな。嵐の先のことを考えて生きたまえ。それが去ったとき、輝きを放つ人間になってほしい」。最後のシーンで盲目となった森繁が叫ぶ。「この函館で、俺たちみんなで生きていこう！」。函館出身の俳優、益田キートンの友人である森繁久弥は、谷地頭の旅館「池の端」が常宿で、五島軒にも良く寄ってくれました。そのときの写真がロビー正面の「蘆火野記念ホール」に展示してあるので、お帰りの際には是非ご覧になって下さい。

イギリス風カレー

最後に、これから召し上がっていただくカレーライスの話しをします。

日本では、カレーライスはインド由来と思っている人が多い。これは誤解です。幕末期に入ってきたカレーは英国人のものでした。英国人はインドの香辛料を独自にブレンドしたパウダー（粉・カレー粉）を日本に持ち込みました。カレー粉は肉の臭みを消すため、肉食の習慣がなかった日本人に受けた。ちなみにインドにはいまだに“カレー粉”というものはありません。自分の家の好みで香辛料を組み合わせて食べるからです。明治の初めころ、現在のＳＢ食品の前身が日本人好みのカレー粉を製造して成功して以来、カレー粉は国産品が圧倒的です。日本人はインスタントの固形カレーも発明し、本国イギリスにも輸出しています。初めのころ、カレーは「ライスカレー」と呼ばれていました。これは日本人の趣向をよく表しています。日本では「今日のお昼“ご飯”は何を食べたの？」と聞いたとき、「昼飯はラーメン」「僕はスパゲッティ」「お刺身定食」という具合です。お米がなくとも「お昼ご飯」なのです。ご飯は主食で、肉や野菜はおかずだからです。明治人にとってのカレーライスは「ご飯に“おかず”としてカレールーをかけたもの」でした。当初は「ライスカレー」と呼びました。実際、明治12年の創業から変わっていない献立にはみなライスがついています。オムライス：ご飯を炒め、卵の薄焼きでくるんだもの。チキンライス：ご飯を炒め、鶏のみじん切りを加えてケチャップで味付けしたおかずを添えたもの。ハヤシライス：ご飯に、ビーフシチュウの肉や玉ネギなどのおかずを添えたもの。カレーライス：ご飯に、カレールーで煮込んだおかずを添えたもの。どれもこれも主役は主食であるご飯。副菜は何でもよかったと言えます。でも、ライス表示の献立が増えてくる過程で、ライスカレーはカレーライスに変更されました。ライスチキン、ライスオム、ライスハヤシでは何となくゴロが悪かった。カレーだけはどちらが先でもいいのですが、多数派に順応させられたのです。なじみのある白いご飯に、西洋のおかずを添え、西洋の輝く銀食器で食べる。新しい和食であるカレーライスが、「和魂洋才」の旗印とともに全国に広まったのは当然です。天皇陛下は「このカレー缶詰は美味しい。それなら昼食のメニューがフランス料理であっても、このカレーを組み込めないか？」と言われた。この当日の正餐が、五島軒の新しい伝説のメニューになりました。明治のころは、野鴨のカレーはチキンカレーよりも幾分安かったようです。今では高額ですが、3,500円は全く手が出ない金額と言うわけではないと思います。今日のカレーは五島軒の創業の味である「イギリス風カレー」です。是非、天皇陛下がご賞味された伝説の「鴨カレー」も一度召し上がって下さい。

お約束の時間がきてしまいました。ご質問があればお食事中でもお受けします。ご静聴ありがとうございました。

次回の市民公開講座は３月に予定

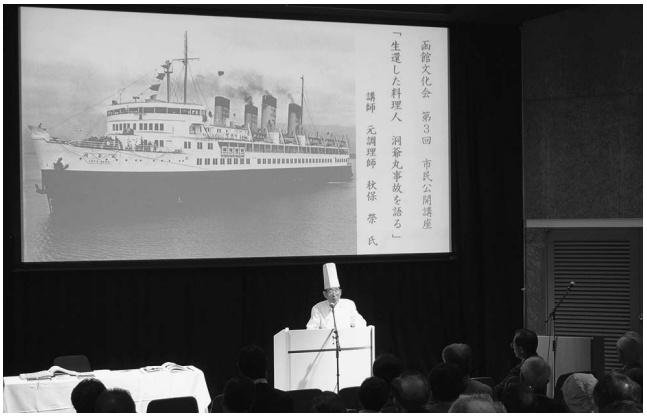
第４回市民公開講座は、「音楽」をテーマに３月中旬に開講を予定しております。

開講日時、講座の内容、講師等決定次第改めて会員皆様にお知らせいたします。ご期待下さい。

第３回市民公開講座（平成29年９月８日）

生還した料理人　洞爺丸事故を語る

元調理師　秋　保　　榮



お話しをする前に一言申し上げます。洞爺丸の悲惨な事故から63年の歳月が流れました。実はあの事故で生還した当時の洞爺丸乗組員のみなさんや我々の仲間も既に亡くなって、函館には私一人になってしまいました。人々の記憶も薄れて来ている今、あの大事故を風化させないためにとこういう場を設けていただきまして大変ありがとうございます。

あの遭難事故の２ヶ月前昭和天皇、皇后両陛下が洞爺丸に乗っているんですよ。私としては両陛下が乗った洞爺丸で料理を作ったという大きな誇りが、私を生きさせてくれたのではないかと思っています。

実は私は当日洞爺丸の乗組員ではなかったのです。本来大雪丸の乗組員だったんですけど前の日に突然「明日洞爺丸に外人さんが80人ほど乗ることになったから、そこの料理を作ってくれ」と云われて洞爺丸に変わったんです。そして９月26日洞爺丸に乗船しました。２ヶ月前に天皇皇后両陛下をお迎えした船内はロビーなどものすごく立派でそれに乗ったことに大きな幸せを感じました。

午後５時、洞爺丸が満席になりました。実は定員オーバーだったのですが、乗船が完了しました。私らは鉄道弘済会の職員で、仲間は売店、食堂、それからコックという12人編成で乗り組みました。ところが５時半頃になりましたら「外人（兵隊）さんに夕食を出してくれ」と言われました。突然のことで、とにかくメニューの中からそれぞれ違うものを全部出すというのがとても大変でしたが、中でもカレーを食べる方がとても多かったんですね。今は大概ご飯の上にカレールーをかけるけど、私らの時にはカレールーを入れる容器が別にありましてそれとご飯というようなことでとても大変でした。外人さんはステーキとかポークチャップとかフライ、オムレツ、卵料理など、次から次と注文されまして調理師４人でほんとに大変でした。

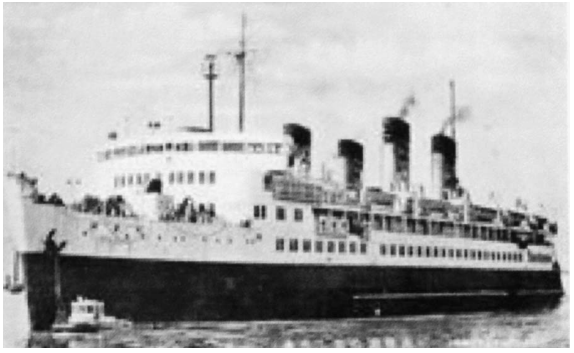
そしてだいたい外人さん達が食べた終わったと思う頃に船長からの放送がありまして「秋田沖で台風がものすごく発達している」ということで「これから七重浜沖に停泊する」という放送でした。こういうのを「テケミ」（天候警戒運航見合わせの意味）と言うんですけどそれでお客さんを乗せたまま七重浜沖に停泊したんです。船が揺れるとお腹が空くというけど、お客さんはどんどん入ってきて注文がありましたから調理も続けていました。午後７時頃になって材料が足りなくなってストップをかけました。岸壁にまた着くという話もあったもんですから、その時にもう一度材料を仕入れようということの中での七重浜停泊でしたから、大変だなと思いながらも調理を続けていました。

そうしたら７時頃でしたかね、風がドーッ、ドーッって吹いてきたもんですから「さーっ、これは大変だ」と思いました。油での揚げ物は出来なくなりましたが、とりえず「ストーブ前」のステーキを焼くもう一人と私は調理をしていました。片足を前に出し両足で踏ん張りながらでした。その内に船がどんどんどんどん揺れ出しまして、私の後に食器棚が並んでいたんだけど、突然そこから食器がドーッと飛び出してきてすごい音を立てて下のタイルに落ち粉々に壊れ大変な有様になりました。上司に当たる人が「もう

調理服姿で講演する秋保　榮 氏

この辺で料理は止めよう」ということで私はそこを離れて上の方へ上がっていきましたが、船員さんたちが走り回っていました。私らの仲間もどこに行ったんだろうと探したんですけど見あたりません。私はひとりぼっちになったもんだから、一等船室の外人さんがいるところへ行ったんです。すごく立派なところでしたが、そこへ入っていきました。ロビーはいっぱいでした。外人さん達はでかいのでロビーの中は入れないありさまでしたが、それでもロビーの右壁側と左壁側に隙間があり、私はなんとなく左の方の壁際に入っていったんです。これが生還に繋がる一つ目です。

そのロビーには10人掛けくらいの大きなテーブルが５つあったんです。私は左の前の方にいて待機していました。外人さん達は座っていれなくて皆がお互いに捕まえ合ったり、テーブルにしがみついて揺れに耐えていました。私は左の前の壁に固定されていた半円形のテーブルにしがみついていました。船が右に傾いたときは左の上の方に回り込み、左に傾いたときは右に回り込んで自分の身体を支えていました。ところが、その内に大きな波がドーンと来ちゃって右の方に大きく傾（かし）がったんです。そうしたらロビーにいた外人さん達やお客さんが右の壁の方に押しつけられるようにひとかたまりになっちゃったんです。もし最初にロビーに入ったとき右側に行っていたらきっと僕はその人達の下になって押しつぶされていたと思います。入り込んできた波で床は滑るし、折り重なった乗客を波が呑み込み、浮いている人には椅子とかロビーにあった家具や調度品がぶつかっていました。洞爺丸の貨車甲板に積み込まれていた40両あまりの貨車がドドーッと倒れたもんですから船が右側を下に横になってしまったんです。それでどうしようもなくなりました。逃げることも出来ないんですよ。その内大きな波が来るとゴーッと天井まで海水がいっぱいになり、折り重なった人たちはたちまち波に呑まれてしまいました。私は頭が壁にドンとぶっつけてしまい水を飲まないように息をこらえていましたが「もうだめだ」と思ったときに、自分の一番大事な（後に結婚した）人の名前を叫んでいました。その瞬間波がスーッと引いていきました。そんなことが２～３回続きました。そのとき向こうに水中電灯に照らされた窓が見えたんです。これが生還できた２つ目です。



ありし日の青函連絡船「洞爺丸」

姿は見えないんですけど船員の腕が向こう側から照らす小さな窓に見えたんです。波がいっぱいになるとその灯りがドーンと上がり、水が退くとドーンと１m50㎝もあったでしょうか下がるんです。諦めかけていた私にその窓から波と共に出て行った人がいるのをその灯りで見えたんです。それで「よーし」と思い、既に亡くなった人はいっぱい浮いていましたがどうすることも出来ません。かき分けるようにして窓の方へ這い寄って行ったんです。４回目にドーンときたときに波と一緒にダーッと外に出ることが出来ました。船が倒れていますからデッキの手すりが上にあってそこに身体が勢いよくドーンとぶつかりました。先に出た人はデッキの金網の所に足を挟んでしまい、この方は命は助かったのですが踵が粉々になったそうです。他にも黒い影が波にもまれていました。後から判ったんですがあの森山加代子さんの兄貴だったそうです。何かに捕まっているんだろうなと思っている内に私は海に放り出されていました。

大きな波がドーンと来ると海底の砂にガーッとおされてしまうんです。連絡船に大きなブイがあるんですけど、それに10人ほどの人が捕まっていたんですが大きな波が来るとそのブイが立つんです。そして波がスーッと引くと捕まっていた人は誰もいなくなるんですよ。今でも忘れないのはそんな時に「佐渡おけさ」の唄が聞こえたことです。この方亡くなったと思うんですが、やはり故郷のことを思っていたんだろうなと思います。波が大きいから海中に沈んでまた浮いてくるという感じでした。波にもまれて３回目くらいだったでしょうか膝頭が砂みたいのに触れたんですよ「あれっ、七重浜の海岸際に来ているな」と思った時に大きな波が来て、七重浜海水浴場の砂浜の草にふれながらダーッと流され、後で測ったら水際から300メートル陸側に押されていました。新聞などには風速50メートルと書かれていましたが、洞爺丸の風力計は60メートルで止っていたそう

ですからそれ以上の風速と波でボーンといっちゃったのだと思います。一生懸命這っていたら２人の人がきて「頑張んなさい」と言って抱えていただいたんです。バスに乗って目が覚めたら協会病院でした。それから75日間入院しました。生還に繋がる３つ目に21歳と云う体力や回復力もあったと思います。

それでも私が入院して１ヶ月過ぎまでは寝たっきりでした。肋、腕、足と右の肩がだめで、ひびが入ってました。結局６ヶ月入院後の15日間は登別の船員寮で温泉に入って療養して戻ったんですよ。

私は鉄道職員ではなくて鉄道弘済会船舶部の職員です。退院後はその後も連絡船で調理人として仕事をしました。休みを利用してはいろんな所で修行をしたり、帝国ホテルで一週間でしたけれど勉強させてもらったりしたこともあります。洞爺丸の代わりとして作られた十和田丸でも仕事しました。私たちのベッドは船の下の方にあるんですけど、ちゃんとした船なのに少し揺れただけでもおっかなくなりベッドに寝ていられなくて上の方に上がってきてしまいました。そんなことがしばらく続きました。

あの事故では「船長が悪い」と云う人もいますけど、船長さんは最後までブリッジに残って亡くなりましたからね。船長さんが一番かわいそうだと思います。私たちの料理長は船に酔う人で、私たちが上に上がるとき料理長も一緒に行こうと云ったんですけどここに居ると言って残ったんです。遺体の収容に潜った人の話によると、料理長は冷蔵庫の下敷きになって亡くなっていたそうです。切ないですね。また、三等船室のお客さんのことを考えるとしばらく寝られなかったですよ。だって逃げるところがないんですよ、一番下で。貨車を積んでいる下でしょう。その貨車が倒れてしまったら逃げ場がないんです。きっと三等船室の中で乗客は船が右に傾けば右に左に傾けば左に動かされてすごい恐怖だったと思うんです。潜水夫によると折り重なって亡くなっていたそうです。本当に苦しかったろうなと、悲しく悔しい思いがしました。

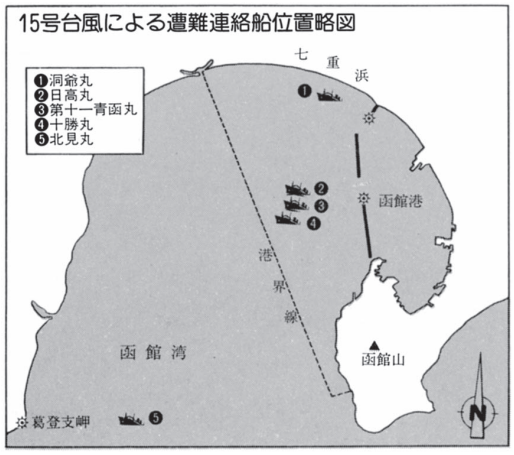
毎年９月26日に七重浜の慰霊碑の前で慰霊祭があります。遺族会がありまして一緒にお参りするんですが、その時遺族の人から「あんたは船のどこにいたんだ」「あんたはどこから船を出たんだ」それから「家の父さんはどこにいたんでしょうか」「私の息子を見ませんでしたか」と言うことを訊かれるんですよ。でも私はあの日初めて洞爺丸に乗ったんですよ。大雪丸に乗っていたのに外人さんが乗るからということで、急遽初めて乗ることになった船ですからね。そう言われるのは本当に苦しかった。最後には「あんた一番良いところから逃げたんでしょう」と言われました。そんなことは絶対にあり得ない。「今日まで元気でいられてよかったですね」とも言われました。それからは慰霊祭には朝早く一人で行っています。そういう風に云われても仕方ないと思うんですが、あの事故の後何年間かはいろんな話がありましたね。

ただ連絡船というものは台風であのような事故に遭ったけど、ふだんはとてもきれいなんです。夏なんか青森から乗船してきた大学生たちが、函館山の裏にさしかかると、「函館だ！北海道の玄関に来たよ！」って云うんですよ。今は千歳が玄関でしょうけどね。北海道の玄関に入る乗り物として多くの人に感動を与えた船だったんですよ。

洞爺丸事故の後、トンネルを掘るとか橋を架けるとかいろんな話がありました。津軽海峡は深さが1,000ｍもあるんです。さらにその下を掘るなんて事など私にはとても考えられないことでした。でも日本人の技術力のすごさは素晴らしいと思いました。青函トンネルが完成してあのような悲惨な事故はこれからは二度と起こらないと思います。

最初にもお話ししましたがが、あの時の洞爺丸の船員、乗客で生き残っているのは今では函館で私一人なんですよ。あの悲惨な事故を風化させないために私の務めとしてお話しさせていただきました。

今日はありがとうございました。



●洞爺丸台風海難

昭和二十九年九月二十六日、台風十五号が北海道に来襲、第四便洞爺丸は乗客、乗員千三百十四人と車両十二両などを積載して一八時三〇分函館第二岸壁を出港したところ風雨が強く一九時一分西防波堤沖に仮泊した。しかし漂流を始め、瞬間最大風速五十六メートルの風に右舷に傾斜、二二時一二分ころＳＯＳを発信、二二時四〇分ごろ上磯町七重浜の浅瀬に座礁、横転沈没した。この結果旅客、乗組員の死者、行方不明は合わせて千百人を超えるという青函航路始まって以来の大惨事となった。また第十一青函丸、北見丸、十勝丸、日高丸の貨物船四隻も沈没、乗組員二百七十五人が死亡した。

北海道新聞社発行「さよなら連絡船」より

函館文化会「卓話」
～総会終了後に開催しています～

函館文化会では、毎総会後に「卓話」を開催しております。この「卓話」は、総会に集まって議案の審議を終えそれで解散も如何なものか、この機会を活用して著名な方々の話を聞きながら、より会員の絆を深めようと始められたもので、その「卓話」も今回で14回目を数えました。

今回は、函館を拠点に活動を続けている、講釈師の荒到夢形氏を迎えて「講談と落語」と題して、講談の歴史や特徴、講談と落語の違いなどを解説した後、自作の講談「函館イカ物語」の一節で昭和56年有志により作られた函館イカ踊りの誕生秘話を講釈、出席者から大きな拍手を浴びておりました。なお、卓話での話しのポイントを纏めていただきましたので、ご紹介します。

第14回卓話（平成29年5月23日）

講 談 と 落 語

講釈師　荒 到 夢 形

私は荒到夢形と申します。講談と申しますものは史実も調べますけれどもそのままでは作品にならないものですから虚構を加えております。で、荒唐無稽な話をするものですからこんな高座名にしておるというわけでございます。

さて、本題でございますが、講談とは舌を耕すと書きまして「舌耕芸」と申します。落語などと同じように舌先三寸で皆様方の心を取り込もうと企んでいる芸でございます。そういう意味では詐欺師と大して変わりはないわけですけれども……。歴史から言いますと、落語と講談というのはちょっと違ったところがあるようでございます。

落語の初めは、原作を作った始まりは**安楽齊策伝**という方じゃないかという説が有力です。江戸時代の初め頃「醒睡笑」という小咄の本が落語の元だろうと言われておりますが、実際に落語が演じられたのは元禄時代、上方つまり京都大阪あたりですね。**露野五郎兵衛**という方が葦簀張りのような小屋を建ててお客様を呼び込みながら話をした。これが初めではないかと言われております。その後**米沢彦八**という人が現われまして本格的にこれが広まっていくわけです。江戸東京の方ではちょっと違いまして、最初は武士が集まる料亭ですとかそういう所に呼ばれてお話をしたというのが元だそうです。話をした人というのもいろんな階層の人がおりまして、大工さんもおりましたし武家の次男坊三男坊というのもおったようです。それがだんだんと話芸が磨かれていってお座敷芸から寄席芸へと広がっていった。ですから、上方の方がわりと庶民的で江戸の方がちょっと粋な感じを大事にするという流れでございます。

講談はと申しますと、元々お坊様が始めたものじゃないかと言われております。平安時代には説話を集めた書物が出ておりますけれども、この中に仏教説話というものがございます。その仏教の教えをそのまま書いてもあんまり読んでもらえないのでちょっと面白くしようという風なこともあるのでしょうし、また実際にあったことをもとにして仏教の話を絡ませてと言うようなこともあるのでしょう。昔のことですから識字率というのが非常に低かったので、

一般庶民に話すためには話芸を磨く必要があったわけです。しかしやはりそこは仏様の教えを説く訳ですから、落語みたくあんまりふざけたことは言えませんので、ある程度納得させるようなストーリーと話の調子で聴衆を引き込んでいったというわけでしょう。それが本格的に行われるのは、太平記読みと呼ばれるお坊様方が現われ南北朝の戦乱の様子を描いた軍記物語を仏教の教えをまぜながら説いたものが始まりではないかと言われております。さらに江戸時代になりますと赤松法印というお坊様が徳川家康の前で太平記を読んだ、これが講談の始まりではないかという風にも言われておりまして、武士階級の間に段々、段々と広がっていったようです。江戸時代の初め頃というのは徳川幕府がいろいろな大名を取りつぶしました。それで浪人がたくさん出てきたのです。その浪人達は就職活動をしなくちゃあいけない。そのためには自分の履歴をそこで披露する必要がある。印象づけるためにどうするか。血湧き肉躍るような調子で話せば自分が有利になるわけです。こういうことで段々太平記読みが武士の間に広まっていったようでございます。浪人達の中には仕官が叶わないので、辻々で太平記を読んでお金を稼ぐ人たちも現われました。お坊さんの中にも、これは狙いがちょっと違ったのでしょうが……町の辻々でそういうことをする人が現われた。これが辻講釈と呼ばれるものでございます。時代が進んで元禄文化の華やかな頃になりますと、講釈専門の釈場、寄場ができます。さて寄席が出来ますと一通りの話だけ、同じ方向性の話だけではお客様飽きてしまいます。で、いろいろな話をする必要に迫られたということで、例えば怪談話ですとか世話物と呼ばれるような話、また宮本武蔵の伝記などのような剣豪物、武芸物、こういったものが次第、次第に現われるわけでございます。

さて講談というのは歴史に沿って創作していくので多少の勉強にはなるわけでございます。それとまた何しろ勇ましい話が多いことですから、江戸時代には幕府の方も割とこれを保護しておりました。ちょっと例外もあったのです。それは**金襖物**と呼ばれます大名のお家騒動を扱った話です。大名家によっては自分の家の尊厳を傷つけられたと解釈される場合もあってこの講釈をした者が処刑されるなどという事件もございます。**馬場文耕**と言う人はそれで命を失っているのです。しかし落語に比べますとだいぶこの上からの保護が厚く、それは明治になりまして富国強兵が国策になっても同じ事でした。しかしこれは悪いこともございまして、やがて日中戦争が始まりますと軍部に利用され、国威発揚のためにずいぶん戦場の話なんかを面白おかしくやったものですが、これらは今記録にほとんど残っていませんし、またもちろんやる人もおりません。戦後になってやられなくなったのは他にもございます。例えば太閤記の中の豊臣秀吉の「朝鮮出兵」は原題「朝鮮征伐」となっておりますのでこれはなかなか難しい。他にもこれは戦争とは関係ないのですが、女性の立場が向上しましたので国定忠治の中で「妾てかけが云々……」というふうなくだりがありまして、そういうのは今やる人が居ないと言うことです。戦後になりますとGHQから講談というのは禁止の方向で、やるなと言う形になりました。もっともこれは講談だけじゃなく時代劇なんかもそうだったという話です。日本が独立して今はそのような痛い経験を生かして、政治からは一歩距離を置きながら大衆的な娯楽として生き続けているのが講談でございます。

落語と講談という題でございますので、実際にやって違いを説明した方が良いと思いましたので高座を用意していただきました。

さて、落語と講談と何が違うかというのはまず、だいたい最初に何を勉強するかということでその決まりがわかると思うのです。落語ですと、今この話は小学校の教科書に載っているということですから皆様方ご存じでしょうけれど「**寿限無**」という話をだいたい最初にやりますね。私の函館での師匠東家夢助が噺家でございますので、これもちょっとご披露いたします。

『お話の舞台というのは…中略…あんまり名前が長いのでコブがひっこんじゃったんだい』こういう噺でございます。ありがとうございます。笑っていただきましてね。（拍手）

落語はたいがい「おち」がございまして、やり方としては会話が中心で進みます。上下を切ると申しますけれども右を向いたり左を向いたりしながら、おかみさんであれば襟を直してみたり職人や荒っぽいところであれば腕まくりをしてみたりという仕草、所作が入るわけでございます。こういうものが講談にはございません。

講談はどういう物を最初に習うかと申しますと**三方原軍記**というのをやるのでございます。これはこんな感じでしてね。

『（張り扇で調子を取りながら）**頃は元亀三年…**（途中では語りながら聴講者の間を回り全員と握手する。その間ずっと軍記を調子よく語り続ける）…中略…**三方原軍記のうち内藤、一言坂の一席でございます**』（拍手）ありがとうございます。

とにかく講談というのは、調子でこのように聞いて頂くので長時間やっているとだんだんお客様が飽きてくる。この挨拶して回るというのは、もう亡くなりましたけれども田辺一鶴先生という東京オリンピックで名を売った方でございますがこの方がよくやっていた手なのでございます。つまり講談というのは、地の文で会話がほとんどございませんので、説明するという感じで進んでいきます。そこが落語とは根本的に違うわけです。ただこの違いというのはかなり微妙なところもございます。というのは、落語の中には釈ネタというのがありまして講談を元にしたネタです。そこで講談、講釈のネタを落語にする場合にそれをくだいて笑い話にするものもあるのですが、ほとんどそのままやってしまうものもあります。それでは落語の中でオチがないのではと言う方がおられると思いますが、落語の中には笑う噺ばかりではなく人情話ですとか怪談話など何かちょっとじわっとさせるような狙いのところのものは、かえって笑いというのが邪魔になるので講釈からとっていると言うことなのです。

後は小道具のことで申しますと講釈なのでこの机のことは釈台と言いまして、講談講釈の場合は必ずこれがございます。落語の場合はこれが無くて座布団一枚というのが普通の形です。それから講談講釈の場合はこの張り扇というのを使うわけですが、落語の場合はこれを使わずに扇子と手拭い、風と曼荼羅というふうに言いますけれどもこれだけでやるわけです。落語の場合は扇子や手拭いが時々道具に化けるわけですね。例えば先程やった蕎麦を食べる時はこう（扇子を箸に食べる仕草）なりますし、手紙を書くときにはこんな風（扇子を筆記具に手拭いを紙に見立てて書く仕草）にやるわけですが、あんまり講談には所作はございません。そのような違いはありますが今言った落語は江戸の落語です。上方の方に行きますと釈台の代わりに見台というのがございまして、これを膝隠しと言う人もいますが……それでも張り扇は使わないのです。これ（手拭い）の代わりに扇子ともう一つ小拍子と申しまして木の欠片みたいなのを使います。この二つを使いながら舞台転換ですとかいろんな事に使うわけです。後はよく上方の方では嵌め物と申しまして落語の途中で音楽を入れることが多いですね。これは江戸落語にはほとんど無い。無いことも無いです。たちきりという落語の中に出てくることは出てくるのですが……そういう風に地域によっても落語は違うし、それと講談を比較した場合は似ているところもあり違うところもあると言うことなのです。落語の方はより庶民的な芸のためにいろんなものから取り入れ、それが何でも許されると言う面がございます。物真似をする人もおりますし、歌舞伎ですとかそういう所の真似というのも昔からやられている。講談ではなかなかそういうのは無いわけです。

さて、それでは私が北海道でどんな講談をやっているかということで申し上げたいと思います。北海道には今まで古典講談というのが無かったので、今私が古典講談を作っていると言うそんなところでございます。函館というのはうまいことに江戸時代すでに高田屋嘉兵衛も来ておりますし明治の開化期にさまざまな激動の時代もありましたから作りやすいわけなのですが、この現代に近いところ、ここらへんもわりと講談になりますので、函館いか物語なんて言うのを作ったことがございます。それでは、その一節を……。

『**さて、イカ踊りがこの世に誕生いたしましたのは…中略…函館のイカ踊り由来の一席、これをもって終わりといたします**』（拍手）

このように落語ですと何か最後にオチが来てだいたい演者が素に戻ってこれで終わりですよって事をあらわすのですけれど、講談ですと「これを持って読み終わり」あるいは「ちょうどご定刻でございます」なんていう風に締めるのが通例でございますね。

ということで落語と講談と題しましてお話申し上げました。ご静聴ありがとうございました。

特集　函館の歴史と文化を語り継ぐ ②

～ テーマ「函館の坂道」～

函館文化会が取り組む「郷土の文化」の伝承に因み、毎年発行する会報に函館の歴史・文化のテーマを取りあげ、会員の皆さんにそのテーマに沿った思いやエピソードなどを綴っていただき後世に残していきたいと、特集「函館の歴史・文化を語り継ぐ」を継続して取り組んでまいります。

第２回目は「函館の坂道」をテーマに取りあげました。函館の街に異国情緒を醸し出す役割を果たしている「坂道」、そんな「函館の坂道」にまつわる想い出を５人の会員から投稿いただきましたので、ご紹介いたします。

なお、次号（第80号）第３回のテーマは「大門・松風町」としました。大門や松風町にまつわる皆さんの思いや・エピソードをお寄せください。応募の要領等は、改めてお知らせいたします。

基坂　坂下には明治天皇御上陸記念碑が聳える

立待岬へと続く「無名の坂道」

池　上　信　廣

その坂道は、市道谷地頭12号線にある。市電の終点谷地頭から「西部巡回通り」を真っすぐ進み、300メートルほど進んだところで住三吉（すみよし）神社の二の鳥居に到達する。ここから、立待岬へと進むとすぐに坂道が目に入ってくる。この坂道は名も無いのが特徴である。鞍掛山の麓にあり、坂道の両側が市の共同墓地となっていて、その真只中を直線状に道が通っている。道幅も狭く、観光バス１台がやっと通るという難所でもある。春先には、新人の運転手とガイドの乗った研修中の観光バスをよく見かけたものだ。

通称「穴町」が坂の始まりにある。昭和９年の函館大火の火元（住吉町）といわれる場所がここ穴町である。ここの土は庭土としての評価が高かったことから、湯川温泉街の旅館の庭に利用されたと話しに聞く。当時は荷馬車の時代で、認知されるにつれて山肌が削られ、次第に穴が大きくなり、私がここに移住してきた昭和46年には、ちょうど10戸が建つまでの広さになっていた。

その頃の坂道は、夏休みともなると、立待岬海水浴場をめざす親子、友人仲間等老若男女で大賑わい、行き交う人達で混雑していた。海水浴場のアイスキャンデー売りも結構な繁盛ぶりだ。春・秋のお彼岸、７月の新盆には、墓参りの家族が、お花・線香・供物を手に訪れ、墓標のあちこちから僧侶の読経の声が聞こえていた。また、綿アメ、玩具、ヨーヨー、大流行したダッコちゃん人形の露店等が並び、地蔵堂の方から檀家の婦人による御詠歌も聞こえてきたものだ。土・日曜日には自家用車で墓参りに来た人が路上に駐車し、観光バスのクラクションがけたたましく鳴り、ガイドさんの笛に誘導されるバスも数多く見かけた。磯釣りを楽しむ釣り人もまた、この坂道を通って立待岬へと向かう。元旦には、岬で御来光を拝む人が訪れ、中秋の名月には、ここで月見を楽しむ人達もこの坂道を登る。界隈の人は、前浜から、太陽（日の出）、月（月の出）が見られるので、岬へ行く人達は遠方からということになる。私も

中学生の頃に親友と初日の出を拝もうと早朝に万代町から立待岬をめざしたことを懐かしく思い出す。

この坂道、遠景としても楽しめる。函館公園の擂鉢山にある東屋から見ると鞍掛山の裾野を一本道となっていて、市の共同墓地を山側と海側に切り裂くように延びている様子や住宅街と墓地の境界線をはっきりと映し出す。桜・紅葉・雪と季節ごと趣のある風景が楽しめる。函館山展望台から立待岬方向を眺望すると、津軽海峡と下北半島、汐首岬を背景に溶け込み、鳥瞰しながら格別の一枚が撮れる。夕方から夜にかけては大森浜、住吉漁港からの景観もお勧めである。坂道に７基のナトリューム灯が設置されており、オレンジ色の街灯が点々と道沿いに灯る夜景の美しさは、知る人ぞ知るスポットでもある。

坂道と私は、まず、蚕の飼育のために桑の葉を採りに二日に１回はこの道に世話になった。長男が小学校２年生の時に長野に旅行した方から蚕を譲り受け、飼育を始めた。蚕の食べ物は桑の若葉だけなので、新鮮な若葉を用意しなければならない。坂道の山側の方に桑の木があるのだ。蚕が卵から幼虫になる時と桑の若芽が出る時がぴったりと一致する不思議さに驚かされたものだが、30年近く続いた飼育も地球温暖化？劣性遺伝？のため絶えてしまった。

また、春先の楽しみの一つは、ウグイスの鳴き声の入ったラジカセで野生のウグイスと、この坂道で鳴き合わせをすることだ。テープのウグイスは、松前町の職場の先輩からのものだが、縄張りのはっきりしているウグイスの反応は鋭く、遠くにいる鳥も、たちまち姿を見せ、木々の陰越しに追ってくる様を道すがら楽しんでいる。退職後、健康づくりにと立待岬駐車場で午前６時半からＮＨＫのラジオ体操を始めた。この坂道の草花は種類も多く、春はワラビ、秋は山ブドウ、コクワも見られる。その年その年の気候が微妙に変わってきたことも実感する。

この坂道にゲートがあるのも特徴である。地蔵堂の直近に設けられ、冬期は車のみ完全閉鎖、春～秋は午後８時以降、翌日６時迄閉鎖する交通規制がある。若者が深夜に立待岬に集合して暴走を楽しみ、その騒音と坂道を猛スピードで逆走し、カーブを曲がりきれずに住宅に突っ込む事故が相次ぎ、安全確保のために設けられたようである。規制

立待岬へと続く坂道から谷地頭の街並みを臨む

を知らずに立待岬を訪れる車が立往生した時には、どん詰まりの穴町に進入してくる車も結構多く、『せっかく来たのになあ～』と変に同情もしている。

戦後の昭和二十年代は、まだ自動車も珍しく、この坂道は、冬には、ソリすべりが楽しめたようである。親手づくりの一人乗りソリを手に子ども達が集まり、スピードや距離を競って滑り、曲芸まがいの乗り方も自慢して楽しんだようである。時には、大人も加わり畳一枚程もある荷物積みソリに、子どもと一緒に乗り、足を上手に使って左右に操り、両足でブレーキをかけ、福田商店の横道へと滑り降りて楽しんだことなども伝え聞いている。

ここ数年は、海外から立待岬を訪ねる観光客が目につく。特に冬はアジア系外国人で、市電を利用し徒歩で目的地をめざす人達だ。観光地函館のスポットである立待岬へ通じるこの『無名の坂道』が、今後、函館の発展とともに、どのように歩みを共にし存在感を高めるのか楽しみである。

◆

いけがみ　のぶひろ　昭和15年函館市生まれ。昭和37年大学卒業後、渡島管内、函館市内の小学校教諭、教頭、校長を務め、平成12年３月退職。現在、函館文化会理事

私　と　坂　道

末　永　玲　子

私が生まれたのは旧留辺蘂町にある温根湯温泉という自然豊かな温泉街です。この街の温泉は有史以前からアイヌが、狩猟の際に利用していたといわれる自然温泉で、明治32年に国沢嘉右衛門、大江興四蔵らによって温泉旅館が数件建ち、本格的な温泉街として歩み出した街です。今でも私の脳裏には大きな清流を挟んで立ち並ぶ旅館が思い出されます。

その後、私が５歳の時父の転勤で函館に引っ越すことになりました。それも母のために空気のきれいな所ということで青柳町日暮通りにあった喫茶山小屋の右横の坂を登りきった一番てっぺんに住むことになったのです。お嫁にいくまでの20数年もの間でした。喫茶山小屋を覚えている人は今では少ないかもしれませんが、函館では有名な喫茶店でした。ロシア人大工が建てたログハウス風の建物で、庭には東屋があり、本州からの旅人の間ではかなり有名だったようです。今でもその当時を懐かしみ、喫茶山小屋をミニチュア模型で再現しようというファンもいるくらいです。

私たち三姉妹は小学校の時からその喫茶山小屋の横の長い急な坂道を下り、函館公園を通り抜け、さらに坂道を下り青柳小学校に通いました。「行きはよいよい、帰りはこわい」とよく言いますが、帰りは登り又登りで、最後のとどめは例の急な坂道でした。一気には登りきれず途中何度も何度も休みました。その上、鞄が重く何度も持ち替え、時には空腹と疲労で死んでしまうのではないかとさえ思いました。その当時は坂道を恨んでいました。また当時は各家庭にお風呂もありませんでしたから、谷地頭温泉に行くしかありませんでした。体の弱い母といつも温泉に行くのですが、帰りは三姉妹が交代で母の背中を押して母の負担をできるだけ少なくしようと頑張りました。体の弱い母になんと冷たい坂なのだろうとも思いました。

しかし、良かったこともあります。我が家を訪れるお客さんは皆「素晴らしい、この景色!!」と感嘆の声をあげるのでした。その時だけは「どうだい、羨ましいだろう」と胸を張ったものです。正面には立待岬が、右側には函館山が広がっていました。函館山の南東に位置し、海に突き出た断崖にある立待岬の先に広がるのは津軽海峡です。夜にはイカ釣り漁船の漁火が煌きとてもきれいでした。そんな次の日の朝はイガ、イガというイカ売りの声がきかれたものです。このイカ売りも坂の途中までは来るのですが、我が家までは来ないのです。この時も坂を恨みました。

そして右側に見える函館山は本当に季節を感じる山でした。山は日々色が変わるのです。まるで絵筆で私が色付けしているような錯覚を起こすくらいです。春は枯れ木に緑の絵の具を薄緑から濃い緑に徐々に重ねていく、秋は赤や黄色の絵の具を、冬は白の絵の具をと本当に楽しみました。朝に、夕に鳥の声や虫の声を聴き、てんとう虫や蝸牛と遊び、冬は「されよ」と言いながらそりや竹スキーを楽しむこともできました。

しかし残念なことに、こんな高い場所に住んでいたにもかかわらず、花火大会だけは見えなかったのです。港側の海は見えないからです。「ドーン」とい音を聞くたびに悔しさとい寂しさを感じました。帰りの坂を登る苦労を考えると、山を下りて見に行く気にはなれませんでした。

中学校もやはりあの坂を下り日暮通りを登り潮見中学校へ通いました。高校もやはりあの坂を下り日暮通りを登り潮見中学校学校前を通り、護国神社坂を見下ろし、さらに谷地坂、南部坂、二十間坂、大三坂を見下ろし、そして八

海と街を見渡す景色が楽しめる八幡坂

幡坂を見下ろした所がようやく私の高校、北海道函館西高等学校だったのです。こんなことから坂は私にとっては切っても切れない関係でした。

それにしても西高等学校から見る「坂の街函館」は本当に美しい。美しすぎました。周りにある教会を含めすべてがあまりに美しすぎました。つい物思いに耽り授業に集中できないこともしばしば……。ボーと汽笛を鳴らし出航する船たちを見て、あの海の先にはどんな世界があるだろうか、ワクワクするような、きらびやかな世界があるに違いない、こんな田舎町函館を出たい、外国に行きたい、と夢はどんどん広がるのでした。

今考えても、駒ヶ岳の秀麗な姿を覗かせる山並みの函館湾、周囲を見渡せば元町の教会群、見上げれば函館山、海を望む坂の石畳、真っ直ぐと伸びた270メートルの1本道の壮観さ、夜になると街頭で照らされた石畳のセピア色、とあまりにも素晴らしいスポットにある西高等学校です。辻仁成、佐藤泰志、麻生直子、森真沙子などの作家を輩出するのもわかるような気がします。

そんな青春時代を過ごした坂の街、函館に、今は本当に感謝しています。これらの坂道のおかげで、私は足腰が丈夫で元気でいられるのだと思っています。あんなに坂道を恨んだ私ですが、今では山登りも大好き、歩くのも大好きです。「坂よ、ありがとう」と叫びたいぐらい坂道が大好きです。「坂の街、函館ありがとう！」

◆

すえなが　れいこ　昭和21年留辺蘂町温根湯生まれ。大学卒業後、函館市内高等学校に教諭として勤務、平成７年に退職。現在函館朗読奉仕会事務局長

二十間坂の想い出

若　山　　直

函館港に入港する船から望むと、海岸から山に向けて20本ほどの坂道が山に向かって伸びているのが見える。この坂道の１つ、幅が二十間（約三十メートル）あるので「二十間坂」と呼ばれる坂道がある。五島軒が店舗を拡張し、この坂に面してレストラン雪河亭を作ったのは昭和59年、３代目の父若山徳次郎の時代だった。父は生前、「昭和９年の函館大火は谷地頭から火が出て強風にあおられ、西に広がった。二十間坂のおかげで火は止まり、弁天方面は類焼から免れた。もし五島軒がこの坂より弁天寄りにあったら、火災は免れていたはずだ。幼児だった私は番頭に背負われ、坂を横切って逃げたという記憶がある」と語っていたものだ。

秋になると、二十間坂の街路樹の草むらでは、コオロギなどの虫が鳴きだす。坂道にしゃがんでアリの巣を観察した記憶もある。ある夏の暑い日、夕立が降り、坂の途中にできた水たまりに無数のトンボが押し寄せて卵を生み落としていた。「土が渇いたら卵は死んじゃうのに……」と私は一緒に見ていた金髪の子供たちに言った。「トンボはバカだからね」と彼らは相槌を打った。この時の会話は何語だったのだろう？

昭和20年の終戦から５年間、五島軒はアメリカ進駐軍に接収され、「南北海道司令部」が置かれた。英語のできた父は「ビルディングマネージャー」として徴用され、若山一家は半分になった自宅に住んだ。あの夏は接収の４年目か５年目だった。私は満４歳か５歳になっていたはずだ。後日中学校に入学して英語を習ったとき、祖母が若い兵士とやり合った姿を思い出した。「どうしたの、お婆ちゃん」、「ここは日本だ『文句があるならちゃんと日本語で言いなさい』と説教しただけ。大きな声と身振りで、エーエスバンバイ、ノーノージャパン！」。少々意味不明だったが「ちゃんと日本語で話せ！」と言ったことは理解できた。

祖母は昼下がりになると私の手をとって二十間坂の途中まで連れていき、持参した風呂敷からおにぎりや菓子を取り出して一緒に食べることが多かった。２つか３つになったばかりの弟と一緒に出掛けた記憶はあまりない。「お婆

さんは長男ばかり可愛がる」と、母が祖母に注意していた記憶があるが、昔話を聞かせるには5歳でも幼すぎるし、二歳、三歳では無理だったからに違いない。祖母は出かけるたびに同じ話をしたので、その幾つかは今でも思い出すことができる。「続家から若山家に嫁ぐとき、続家から福士家に養子に入って福士成豊に名前を変えた伯父が、『これからは洋食屋の時代が来るから』と喜んでくれた」こと。「続豊治がスクーネル型様式帆船・箱舘丸を建造した話」、「草むらに座って食べるのはピクニックと言って欧米で盛んなこと」など。確かに、ご馳走でもないのに坂の草むらに腰を下ろして食べるおにぎりや弁当はとても美味しかった。「店舗接収は大変な迷惑だ。でも、あんな大戦争をして負けたのだから仕方がない」と祖母は言った。特に面白かったのは、五島軒に勤務するアメリカ兵の話である。「司令官の食事は専門のスタッフが作る予定だったが、五島軒のコックがフランス料理を試食に出したとたん、アメリカ兵たちは調理補助に回った」、「一般の兵隊たちは卓上に並んだ銀器を見てびっくりした。彼らのテーブルマナーはなっていなかったが、それはフルコースなど食べたことがなかったせいだ」、「司令官が『函館はペリー来航以来、古き良き欧州のマナーを維持している』と函館の食文化を絶賛した」こと。自分が一緒に遊んでいた様々な皮膚の色をした子供たちの両親の話なので記憶に残った。

それから20年余、私はフランスのコック修業からもどり、企画部長として本店に勤務していた。「レストランのお客が呼んでいる」というので出て行くと、金髪碧眼で私と同年齢の女性がいた。「私はキング商会のオーナーだったキングの末裔です」という。「キング氏は函館の娘と結婚したはずですが……」「ええ、私はキング夫妻から数えて三代目です」。そこで母親の持っていたアルバムを出してきて見せた。(この写真は本店のミニ博物館・蘆火野に展示してある)。彼女は先祖の足跡を訪ねて函館観光に来たのだ。日本語はコネチカット州にある大学の東洋学部で学んだという。私はキングさんが函館を引き揚げた後、横浜の外人墓地に葬られたことを教えた。

高齢のアメリカ人夫婦が訪ねてきたこともある。「君があのときのジュニアか？君が英語を話せるのは嬉しい。私は幼かった君より古い五島軒のことを良く知っている」と言いながら、「ここだ、この店で15年間……」と妻を抱いて沈黙した。「君は面白くないだろうが、私にとってここは青春のシンボルなのだ」と言い、懐から古い絵はがきを取り出した。昭和9年の大火の後に再建した五島軒の絵はがきだった。食事後、「五島軒の食事は今でも最高！今回、初めてお金を払って食事ができた。次に来るのは子供たちだが、それまで立派に経営していて欲しい」と言って卓上にチップを置いた。夫婦は抱き合いながら東本願寺の方角に歩いて行った。ギリシャ正教会、カトリック教会などが立ち並ぶ風景は、戦前も戦後も変わっていない。この風景こそ2人には最高のご馳走だったに違いない。

二十間坂の麓には今も昔ながらのレンガ造りの倉庫がある。かつてこの倉庫に隣接して高杉印刷があった。ある夜、その離れから出火し、崖の上の五島軒にその火が吹き上がってきた。衣類を風呂敷に包んで逃げる用意をしていた私は、飛んでくる火の粉を眺め、花火のように美しいと思った。幸いしばらくして火は鎮火し、事なきをえた。

大人になって不思議に思ったのは、五島軒から二十間坂までの距離である。歩いて3分程度で、ピクニックというにはあまりにも近い。4月に138年目を迎えた五島軒の歴史も過ぎてしまえば短い時間なのだろうと思う。これからも「二十間坂」と一緒に歩んで行きたいと思う。

二十間坂から函館山山頂を見あげる

◆

わかやま　なお　昭和20年函館市生まれ。昭和43年大学卒業後、㈱五島軒に入社、研修のため渡仏しホテル学校に入学、卒業後レストラン、ホテルに勤務。帰国後、五島軒企画部長を経て、現在、五島軒取締役社長

「懐かしの坂道」再訪記

平　　昭　世

2017年７月某日。40数年ぶりにその場を訪れた。

私にとって昔懐かしい身近な坂道。それは、函館市電宝来町停留場の前にある、高田屋嘉兵衛の立像から、護国神社までの幅広い「護国神社坂」である。大変幅広い坂であるが、過去の大火の教訓からまちづくりが進められ、結果、幅広い坂が出来たと聞く。

久しぶりに訪れた懐かしの坂道は、アッという間に過去の記憶を呼び戻してくれた。伯母が護国神社の神宮に嫁いだこともあって、小学生の頃までは、護国神社の境内で、従兄弟、従妹たちとよく遊んでいた。神社の境内には多くの松が植えられていて、当時の私には、かくれんぼが出来る最高の遊び場であった。

５月の例大祭を迎える時期には特に胸が躍った。なんといっても荘厳な御輿行列。これを見るのが毎年楽しみで、十字街当たりまで母に連れられて出向いた。行列の中で一際目立っていたのが一枚歯の高下駄で歩く赤鼻の天狗様。とてもとても格好良くて憧れであった。それが故か今でも突然思い出すことがある。

またこの時期であったと記憶しているが、護国神社坂の両側に露店が設置され、子供たちが大好きな駄菓子、ヨーヨー、綿飴、おかめやひょっとこのお面、小動物のゴム風船などが並んでいて心楽しく、何度も坂道を下りてはまた登りを繰り返した。私は白色のタンキリアメが大好物でよく口にした。安価であったことも嬉しかった。後年、伯母夫婦が他界し、また、従兄弟、従妹たちがそれぞれ独立し、当市を離れてしまったので、この坂道ともすっかり疎遠になってしまっていた。

市電停留場から見上げる神社は静寂そのもの。逆に、赤の大鳥居から見る市街地は、建物がグッと迫ってきて、そこに住む人々の息づかいまでが聞こえるようだ。40年の間にビルが何棟増えたのかな？だけど海が右手に見える構図は全く同じだな。きっとあまり変わらずに時を刻んできたのかな。と一瞬タイムスリップしたような錯覚にとらわれながら、しばらく佇んでいた。

本殿には数人の参拝者がいて一緒に行動。神社の縁起物である寄木細工の梟（不苦労・福朗御守り）を購入して、清々しい気持ちで此所を離れた。

次に向かったのは、「幸坂」。

函館山山麓にはたくさんの坂があるが、中でも１、２を争う長さと言われているのが幸坂（約620メートルとのこと）。傾斜が厳しい坂を上がっていくと、幸坂の最高地点付近に建つレンガ造りの和洋折衷の建物が旧ロシア領事館。

船見町にある旧ロシア領事館は、「函館市立道南青年の家」の名称で、青少年の宿泊研修施設として利用されていた。最大120名が宿泊可能なこの施設は、市内はもとより近郊からも多くの子供たちを受け入れた。

小学生、中学生、青年が異年齢交流する中で、子供たちは逞しく育っていった。私は、函館市に勤務中、1987年（昭和62年）から２年ほど、青少年教育を担当したので、自分の所轄事業の時にはこの施設に出向いた。

夏はキャンプファイヤー、冬はクリスマス会、キャンドルの集いなどがあったが、その中でも子供たちが一番感動するのが、施設から函館山山頂までの夜間登山であった。

登山途中で目にする100万ドルとも言われている夜景の美しさに目を見はり歓声が上がる。この感動は、子供たちの記憶の中に一生生き続けることだろう。当時、この施設で情熱を持って熱心に指導に当たられていた、社会教育主

幸坂の上にある常磐小学校跡地から函館港を臨む

事のＳ氏とは現在もご縁があり、いつも心から感謝をしている。たくさんの子供たちに夢と希望を与えた道南青年の家は、1996年（平成８年）にその使命を終えた。

今思いだしてぞっとすることがある。それは、冬シーズンの車の運転。運転に未熟な私は、坂道の制御がうまくいかずに、“あわや〜”ということが再三あった。当時所有していた車が二輪駆動だったので、施設に辿り着くまで何度肝を冷やしたことか。

30年ぶりに記憶を辿りながらその場に降り立った。夏の「幸坂」は、緑色のポプラの巨木が大きく広がり、涼風が優しく頬をなでてくれた。

常盤小学校跡地（現在は船見公園となっている）から、細く長く続いている幸坂を見下すと、その先に函館港があった。空と海が一体となった穏やかな湾内を船が滑るように動いていた。

函館には、それぞれに異なる風情や歴史を持つ坂道がある。どの坂を歩いても絵画のような風景が広がる。こんな素敵な「函館の歴史と文化を語り継ぐ……」ことの大切さを噛みしめた一日であった。

◆

たいら　あきよ　昭和16年函館市生まれ。函館市に勤務し青少年教育係長、婦人青年課長、女性課長などを歴任し平成13年退職。現在、社会福祉法人函館鴻寿会評議員

大三坂の想い出

高　橋　　勇

大三坂は、二十間坂と八幡坂との間にある坂道である。二十間坂はその名の通り道幅が広く、坂の上からは市街地が遠くまで見通すことができ、坂の麓は函館駅へと続いている。八幡坂も道幅が広く、函館湾と連絡船が一直線に見通せる絶好の観光スポットとなっている。それに比べて大三坂は道幅が狭い上に麓は民家に突き当たり、市街地も海も見通せない坂なのだ。

ただ、坂の周辺にはカトリック教会・ハリストス正教会・ヨハネ教会・日本キリスト教団函館教会などの教会群と、東本願寺函館別院・妙福寺・船魂神社など日本の寺社が密集していて、昔から大三坂には世界の宗教が集まっていると言われてきた。

坂の名の由来は、観光案内の標柱に「昔、坂の入口に大三という家印の郷宿があったのでこの名がついた。郷宿というのは地方から公用で出てくる村民が泊った宿である」と表記されている。

大三坂の上方は車が一台やっと通れるくらいの狭い急な坂道が続いていて、その部分を別に「チャチャ登り」という。案内標柱には「函館には珍しいアイヌ語の坂名で幕末頃についた名前らしい。チャチャとはおじいさんのことで、この坂が急なため前かがみに腰を曲げて登る姿が老人に似ていたことからチャチャ登りと呼ばれた」との表記がある。

大三坂という名は昔からあまり知られていなかった。子供の頃に家の場所を聞かれて「大三坂」と言っても分かってもらえず、必ず「二十間坂の隣の坂」と付け加えなければならなかったことを覚えている。

その頃（昭和20年代ころ）の大三坂は石ころだらけの土のままのありふれた坂道であった。坂道の両側には幅一間ほどの下水溝が通っていて、坂道に面した家々は下水溝に渡り橋をかけて出入りしていた。当時はまだ交通量も少なかったので、坂道は子供たちの格好の遊び場だった。学校が終わると知らぬ間に大勢の子供たちが集まり、男の子は缶けり・釘さし・ラムネ玉・かくれおに・戦ごっこなど、女の子は石けり・まりつき・ゴムとび・なわとびなど夢中になって遊んでいた。冬になるとそりすべりや竹すべりの坂となり、自作のそりの出来具合を競い合いながら坂すべりに興じていた。時には交差点ごとに見張りをおいて、チャチャ登りのてっぺんから一気にすべり下りたことも懐かしい思い出である。

坂の中ほどに「みどり湯」という銭湯があった。当時は内風呂のある家はごく少なく、ほとんどの家庭は銭湯を利

用していたので、周辺には寿湯・ラジウム湯・草津湯・大町湯など多くの銭湯があった。みどり湯ではしまい湯になると浴槽の湯を一気に下水に流すので、夜中に急に「ザァー」と大きな音が聞こえて大雨が降ってきたかと驚いたものである。そのせいで湯の流れる方の下水はいつもきれいになっていたが、もう一方の下水は生活排水が淀み汚れていたものだ。

みどり湯の向かいに「豆腐屋」があった。その豆腐屋の主人は小さな楽団のマスターだったらしく、時たま豆腐屋の居間で楽団の演奏や歌の練習をすることがあった。夜になって演奏や歌が聞こえると風呂上りの子供たちが豆腐屋の前に人垣を作ってのぞいていたものである。この楽団はよく神社のお祭りの余興などに出演していた。

バス通りの角から三軒目に老舗の「蕎麦屋」があった。早朝から出汁を取る蕎麦屋特有のよい香りが漂い、朝の食欲が進んだものだ。当時坂下の市電通りに北海道新聞函館支社があり、朝から晩遅くまでひっきりなしに出前の注文があったようで、蕎麦屋の人たちがその出前を届けるために毎日汗だくで急な坂道を上り下りしていた姿が思い出される。

このほか大三坂には、土蔵付きの旅館や料理屋などもあった。また市電通りには道新のほかにウロコ製網船具・丸井デパート・銀行や保険会社などが軒を連ね、大三坂を中心に函館の繁華街としてにぎわっていたことを今振り返ってみると、そこに住んでいたことに何かしら誇らしさも感じられる。

昭和六十年頃大三坂は両側に歩道のある素敵な石畳の坂道に生まれ変わった。さらに昭和六十二年には「日本の道百選」にも選定された。坂にはナナカマドやツツジなどが植栽されて四季折々に風情のある景色がみられ、観光ポスターにも登場するようにもなった。また大三坂は、日本を代表する思想家・評論家である亀井勝一郎の生誕の地でもあることからもその名が知られるようになってきた。

今、大三坂は大事に残されてきた古民家が蕎麦店・アンティーク店・物産店・カフェなどに活用され、昔の旅館がしゃれたペンションになっているなど、古いたたずまいの中にも今風の明るさを漂わせているのはうれしいことだ。ただ残念なことは、バブル景気のときに大三坂周辺にマンション

ナナカマドの紅葉美しい大三坂

が林立したことである。そのために坂上からは市街地や港の眺望が見渡せなくなったし、港からは函館山のなだらかなすそ野が遮られてしまった。もっと早くにバブルがはじけていたら、よい景観が残っていたのではないかと思うと残念でならない。

現在、大三坂は赤レンガ倉庫群と教会群を結ぶ観光道路として、観光客がひっきりなしに往来している。中には外国人の姿も多く見られるようになっている。また、大正時代の古い保険会社の土蔵やビルが新たにカフェやゲストハウスに生まれ変わる工事も進んでいる。これからも大三坂がますますその名が知られるようになり、函館の観光スポットとしてにぎわうことを願っている。

◆

たかはし　いさむ　昭和14年函館生まれ。昭和37年大学卒業後、渡島管内、函館市内の小・中学校の教諭、教頭、校長を務め、平成12年３月退職

特別寄稿

手話の源流の修道院手話

～ 厳律シトー会修道院（北斗市・当別）の手話 ～

島　津　　彰

Ⅰ　シトー会修道院の成立

1　修道院の成立

修道院の成立はクムラン宗団に原型を認め、三世紀中期のエジプトに現れた修道院をその起源としている。シトー修道会は、1098年にフランスのシトーの荒れ地に創立され、なかでもラ・トラップの修道院はベネディクトの戒律を厳格に守る（特に肉食をしない）意味で「厳律シトー会修道院」と呼ばれている。ラ・トラップの名前に由来する男性修道士の「トラピスト」（当別）、女性修道女の「トラピスチヌ」（湯ノ川）は日本でも広く知られている。

2　当別の「灯台の聖母トラピスト修道院」の成立

当別の修道院の成立には、当時の函館教区長（パリ外国宣教会）ベルリオーズ司教の尽力が大きい。キリスト教を広めるため、日夜祈りに励み、労働の尊さの証人であるトラピスト修道者の姿を模範として示す必要があった。創立時にはフランス人５名、オランダ人２名らの計９名を招聘し、1896年11月に日本初の男性の修道院が創立された。初代院長はフランス人ジェラール・プウイエ師（岡田師）である。

Ⅱ　沈黙と修道院手話

1　沈黙について

修道院の戒律は、ベネディクト（480～547）（図１）が作った「ベネディクトの戒律」によっており、現在まで修道院の根本精神として受け継がれている。祈祷、仕事、研究、睡眠、賞罰、食事、休息等に関する日々の定めを全部で73章にわたり記述されている。本稿に関連のあるのが、第六章の「沈黙の精神について」である。沈黙の掟は一日中守られ、特に大沈黙としては聖務と称される時間帯や食事の時間帯は厳格に守られてきた。聖務は朝課（初期は午前３時頃）一時課、晩課等の７回行われ、聖書の「日に７回あなたを讃美します。」に基づいている。

晩課はミレーの描いた名画「晩鐘」で良く知られ、祈りを告げる時鐘に合わせて「主の御使」で始まる祈りをする農民を描いている。終課では、「サルベレジーナ」の祈りの歌が響きわたる。

沈黙の掟は曹洞宗にもみられ「正法眼蔵」では、特に三黙道場として「東司」「僧堂」「浴室」を挙げており、沈黙の中での作法等が記述されている。精神世界では沈黙の重要性が共通しており興味深い。

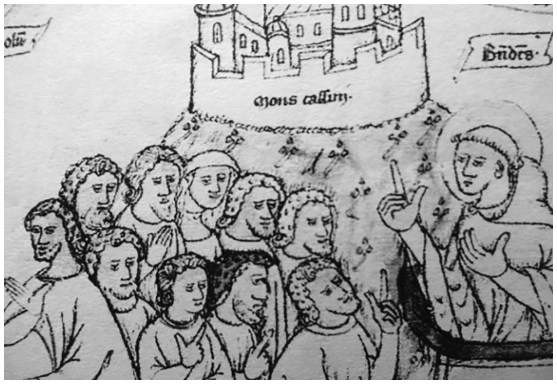


図１　ベネディクトの説教

2　修道院手話について

大沈黙の時間帯の会話は、ノンバーバルコミュニケーションの音声言語を用いない手話により行われた。この結果西欧においては、手話を用いた修道院が聴覚障害教育の場として活用された。これは、修道士が当時の知識階級であり、修道院手話が一般的知られていたことにもよる。歴史上、聴覚障害教育を行った最初の人はポンセ・デ・レオン（1520？～1584）である。ベネディクト派の修道院で誓願し、オニヤの修道院では、権勢と財力を持ったスペインのヴェラスコ家の２人の聾の兄弟の教育を手話と指文字を使った教育を行った。この教育の背景は財産分与の条件としてキリスト教徒の証である信仰告白が出来ることと、読み書きが出来ることが上げられ、ヴェラスコ家ではこの条件を満たす為の教育が必要であった。聴覚障害教育で「手話法の父」と言われるド・レペが神父であることは、「沈黙」の中で培われてきた修道院手話と深い関係がある。

アメリカ先住民の間でも、部族間の言語の違いを超えたコミュニケーションの必要から手話を使用しており、

馬は日本の影絵遊びで使われる「キツネ」の指の形と同じである。貨幣も指で円を作るのは日本と同じである。

なお、ハワイのフラ（元来はダンスの意味）ダンスも、古代ハワイの人々の神への祈りや自然への感謝を音声言語を用いず、ハンド・モーションや足の動きで表現している。音声言語を用いないコミュニケーション手段は異文化でも共通点があり、人間の文化形成の共通点を探る上での視点を教えてくれる。

Ⅲ　修道院手話の現状

1　修道院の「手真似辞典」

「修道院手話」が初めて我が国に紹介されたのは1936年（昭和11年）の日本聾唖協会発行の雑誌「聾唖界」№76号において、当時の函館聾学校教頭・石垣喜久雄氏の当別の修道院への調査が端緒である。石垣は「函館の近郊…　一時間あまりで渡島当別と称する……特に沈黙は鉄則として守られており、必要に応じて意思表示をなすべき時は、唯一小部分に限られた手真似のみが許されております。」と記している。雑誌掲載の表題は「トラピストに於て使用の手真似辞典」で、原書はラテン語による「シトー会習慣書」の「手真似」の項であり、「手真似トラピスト辞典」と改めたものである。全部で533の単語があり、紙面の関係で極一部のみを表１に記載する。

表１　トラピスト修道院「手真似辞典」抜粋

ア） アカ　　赤 アカネヤサイ　赤根野菜 アカルイ　明るい アサ　　朝	 ・下唇に指先を置く（血） ・草を食べるの印 ・右手の凡ての指先を左手の総ての指先の間に相互に入れ掌を下に向ける ・眼の下に指を当てる
イ） イエ　　家 イノリ　祈り インチョウ　院長	 ・屋根の形に両手の先を合わせる ・両手を合わせ指を組合わせる ・親指を示す

2　「手真似辞典」の分類

語を項目ごとに分類すると、①トラピスト修道院の宗教儀式（祈り、聖務など）に関する語（132語）は25%、②労働に関する語（73語）は14%、③食事に関する語（58語）は11%ある。祈りや労働に関する語が多いのは「祈り働け（Ora et Labora）」のトラピスト修道院の根本精神の反映である。食事に関する語が多いのも「沈黙」を大切にする時間帯による。日本の手話と似ている語として表１の中では「赤」「院長」等が挙げられる。

図２　指で逆三角形（神）

3　実際の使用状況

筆者は、2010年にトラピスト修道院でK修道士さんから「手真似辞典」に基づき聞き取り調査を行った。K氏は73歳の柔和な方で、27歳で修道院の門をくぐり、誓願の後、46間の清貧な生活を過ごされていた。

使用されている語は辞典の533の単語のうち、136語と辞書全体の25.4%であった。語を分類すると、多い順番では①宗教儀式に関する語（３１語）は23%。『神』（図２）は指で逆三角形を作って表現する（神学上の三位一体《父と子と精霊》が由来）。その他《キリスト、祈り、聖歌、鐘、十字架、サボ（木靴）等》。②労働に関する語（17語）は13%。《係、切る、草、木材、牧草、雌牛、焼く等》。③食事に関する語（13語）は10%。《甘い、魚、皿、塩、卵、野菜、リンゴ等》。④時間や曜日に関する語（７語）は５%である。その他、《赤、雨怒る、犬、鉛筆、聞く、終わり、数える、紙、黒、白、寝室、血、鳥、猫、花、眼鏡》等である。

中世以来の手話が脈々と受け継がれている様に、伝統の重みを感ずると共に、手話の源流を見いだすのである。

Ⅳ　手話に関する法令等の動向

国際障害者権利条約の条文における言語に関する定義では「手話その他の形式の非言語を含む」とあり、初めて国際レベルで手話の言語性を明文化した条約である。手話を言語として認知している国はアメリカ、イギリス、フランス等で、特にフィンランドでは1995年に憲法において手話が言語であると明文化されており、手話通訳が日常生活の中で保証されている。

日本は、改正障害者基本法の中で、「手話」について言及している。「……言語（手話を含む。）その他の意思疎通のための手段についての選択の機会が確保されるとともに……情報の取得又は利用のための手段についての選択の機会の拡大が図られること。」と述べている。2013年には県レベルでは初めて鳥取県が「手話言語条例」を制定し、北海道・石狩市においても「手話に関する基本条例」が2016年４月に施行され、共生社会の実現が期待される。

Ⅴ　「修道院手話」の考察

１　文化史的に残すべき「修道院手話」

言葉は生き物であり、それを使用する民族や人々の文明の衰退により滅びゆく言語も世界に少なくない。我が国ではアイヌ語や沖縄県の八重山語、与那国語等が消滅危機言語である。英国ではロマ語（いわゆる放浪の民であった人々で、現在は差別用語当たるジプシーの人々の言語）。フランスでは高原地帯に住み、伝統文化を大切にしているオーベルニュ語。スペインの中でも独自の文化（ベレー帽の発祥地）をもつバスク語は脆弱の評価である。これらと同じレベルの言語ではないが、「修道院手話」として極限られた使用者しかいない現状ではやがて消えゆく可能性が十分考えられる。映像に残すなど、早急に手立てを考える必要があろう。

２　情報化社会での「沈黙」の重要性

高度な情報化社会にあって人々は、絶えず情報の波の中で暮らしている。橋本重雄修道士は“沈黙”について「これこそがトラピスト独特の"宝"といえるでありましょう。沈黙によって……内心の喜びを味わい、そして保つことができるかは、修道者のみよく知るところです。」と沈黙の重要性について言及している。

高橋正行修道士は、沈黙・観想の生活を俳句に詠んでいる。

「沈黙厳守　修道院や　虫時雨」
「老修士　黙礼深く　御慶かな」
「九十年　祷りし両手　日焼けして」

厳しい戒律の中の豊かな精神世界が表現されており「沈黙」は、実は饒舌であることを示唆している。

情報が過多な社会では、情報に踊らされているかの危惧を抱く。「沈黙」は、マックスピカートの思索やジブラーンの詩をまつまでもなく、情報化社会にあって静かな時の中で「沈思黙考」する重要性を教えてくれる。

春満開の桜と杉林に囲まれるトラピスト修道院

参考文献

１）古田　　暁：聖ベネディクトの戒律：ドンボスコ社
２）石垣喜久雄：「聾唖界」(76号)「トラピストに於いて使用の手真似辞典」：日本聾唖協会
３）今村　喜登：あの日トラピストは吹雪であった：パウロ文庫
４）高橋　重幸：主日の聖書：オリエンス宗教研究所
５）橋本　重雄：百姓神父昔がたり：中央出版社
６）高橋　正行：木靴の音：東京四季出版社
７）上野　益雄：聾教育問題史：日本図書センター

◆

しまづ　あきら　昭和25年北斗市生まれ。函館聾学校長、北翔大学教授を歴任し、平成28年３月退職。現在は函館臨床福祉専門学校非常勤講師、北海道教育大学函館校「学生相談室」に勤務。函館盲聾教育後援会理事

● 会員を募集しております ●

函館文化会では「郷土の文化を顕揚し、その振興発展を図ることを目的」に活動を続けておりますが、この趣旨に賛同いただける方を募集しております。

皆さんの近くに入会いただける方がおられましたら電話、ＦＡＸ、メールなどで文化会事務局にお知らせいただけませんでしょうか。「入会申込書」をお届けいたします。

● 函館文化会の助成制度について ●

函館文化会では、郷土文化振興事業の一環として郷土文化団体が函館市内において開催する講演会、展示会及び芸能発表会などに対し予算の範囲内で助成を行っております。

事業の実施前に申請を受け、審査の上助成の可否決定いたします。詳しくは、文化会事務局にお問い合わせください。

平成28年度 函館文化会　事業報告及び収支決算

5月23日に開催されました平成29年度定時総会において、平成28年度函館文化会事業報告及び収支決算が承認されましたので、その内容についてお知らせいたします。なお、事業報告、収支決算等についてのお問い合わせ及びご意見・ご要望がありましたら事務局にお寄せください。

平成28年度 函館文化会事業報告

1　郷土史研究者奨励事業の実施

(1)　「神山茂賞」の贈呈

（定款第4条第1号に掲げる事業）

・日　時　　11月7日(月)　午後4時30分

・会　場　　五島軒本店

・贈呈者　　神山茂賞　　森本　貞子　氏

贈呈式後、受賞者記念講演及び受賞者を囲み祝賀会を開催

＊受賞者記念講演

「函館近代史の輝かしさに魅せられて」

(2)　講 演 会（定款第4条第2号に掲げる事業）

・日　時　　10月15日(土)　午後1時30分

・会　場　　函館市中央図書館　視聴覚ホール

・演　題　　高松凌雲と箱館

・講　師　　櫻井　健治　氏（日本近代文学会会員）

(3)　第1回「市民公開講座」

（定款第4条第2号に掲げる事業）

・日　時　　8月23日(火)　午後1時30分

・会　場　　函館大学講義室

・演　題　　“函館弁”の持つ可能性について

・講　師　　角田美知江　氏（函館大学専任講）

(4)　第2回「市民公開講座」

（定款第4条第2号に掲げる事業）

・日　時　　3月14日(火)　午前10時30分

・会　場　　五島軒本店　王朝の間

・演　題　　北の食文化に灯りをともして

・講　師　　若山　　直　氏（㈱五島軒社長）

(5)　会報の発行

「会報78号」を10月1日発行

2　郷土文化振興事業の協力・助成

(1)　後援事業

（定款第4条第1号・第2号・第4号に掲げる事業）

＊「亀井勝一郎　没後50年～人生邂逅し　開眼し　瞑目す～」

函館朗読奉仕会　　7月16日

＊第61回北海道奎星書道展覧会

北海道奎星会　　8月25日～8月30日

＊函館邦楽舞踊協会70周年記念公演「日本舞踊の会」

函館邦楽舞踊協会　　9月11日

＊第14回青春海峡文学賞

北海道高等学校文化連盟道南支部文芸専門部

8月29日～8月30日

＊古典をたのしむ『平家物語』

函館朗読奉仕会　　11月1日

＊第93回赤光社公募美術展

赤光社美術協会　　10月14日～10月19日

＊「小さな親切」作文コンクール

「小さな親切」運動函館支部　　12月15日

以上　7事業

(2)　協賛・助成事業

（定款第4条第1号・第2号・第4号に掲げる事業）

＊第61回北海道奎星書道展覧会

＊第14回青春海峡文学賞

＊函館朗読奉仕会朗読会

＊第93回記念赤光社公募美術展

＊「小さな親切」作文コンクール　　以上　　5事業

3　会　　議

○　総　会

(1)　定時総会

5月24日(火)　於：五島軒本店

（議　題）

ア　議　　案

＊平成27年度事業報告について　　承　認

＊平成27年度収支決算について　　承　認

＊定款の一部改正について　　承　認

＊役員（理事・監事）の選任について　選　任

イ　報　　告

＊「函館文化会講演会」の開催について　了　承

＊「市民公開講座」の開催について　了　承

ウ　卓　　話　（総会議案審議終了後）

・演　題　江差の風土と文化

・講　師　文芸誌「江さし草」

代表　松村　　隆　氏

（平成27年神山茂賞受賞者）

○　理 事 会

(1)　第１回理事会

４月19日(火)　於：ロワジールホテル函館

（議　題）

ア　協議事項

＊文化会講演会、市民公開講座、定時総会「卓話」について　承　認

＊会員の異動（入会）について　承　認

＊役員の改選（選任方法等）について　承　認

イ　報　　告

＊今後の日程について　了　承

(2)　第２回理事会

４月24日(火)　於：五島軒本店

（議　題）

ア　協議事項

＊平成28年度定期総会提出議案について　承　認

＊会員の異動（入会・退会）について　承　認

イ　報　　告

＊「函館文化会講演会」の開催について　了　承

＊「市民公開講座」の開催について　了　承

(3)　第３回理事会

５月24日(火)　於：五島軒本店

（議　題）

ア　協議事項

＊会長、副会長、常務理事の互選について　選　任

＊顧問の選任について　選　任

＊企画委員の選任について　選　任

イ　報　　告

＊今後の日程について　了　承

(4)　第４回理事会

９月26日(月)　於：函館大学会議室

（議　題）

ア　協議事項

＊「平成28年神山茂賞」について　承　認

＊会員の異動（入会・退会）について　承　認

イ　報　　告

＊「函館文化会講演会」について　了　承

＊谷地頭町所有地での「月極駐車場」の開設について　了　承

＊定款第23条第５項の規定に基づく報告について　了　承

（会長、副会長、常務理事の職務執行状況の報告）

＊今後の日程について　了　承

(5)　第５回理事会

２月６日(月)　於：フォーポイントバイシェラトン函館

（議　題）

ア　協議事項

＊平成28年度収支補正予算について　承　認

＊平成29年度事業について　承　認

＊会員の異動（加入・退会）について　承　認

＊今後の日程について　承　認

イ　報告事項

＊平成28年度事業実施状況について　了　承

＊平成28年度予算執行状況について　了　承

＊第２回「市民公開講座」の開催について　了　承

(6)　第６回理事会

３月14日(火)　於：五島軒本店

（議　題）

ア　協議事項

＊平成28年度収支補正予算について　承　認

＊平成29年度事業計画について　承　認

＊平成29年度収支予算について　承　認

＊「函館文化会講演会」について　承　認

＊「卓話」について　承　認

イ　報告事項

＊定款第23条第５項の規定に基づく報告について　了　承

（会長、副会長、常務理事の職務執行状況の報告）

＊函館文化会ホームページの開設について　了　承

＊今後の日程について　了　承

○　諸 会 議

(1)　神山茂賞選考委員会

平成28年度受賞候補者として３名の推薦があり、８月９日(火)及び９月７日(水)に選考委員会を開催、選考の結果「森本　貞子氏」を神山茂賞受賞候補者として答申することとした。

(2)　企画委員会

函館文化会が実施する事業の企画・立案に携わるとともに、その開催・運営にあたっている。本年度の委員会の開催日数はこれまで6回（持ち回り委員会を含む）で、主なる実施・担当した事業は次のとおりである。

・文化講演会の開催協議及び運営
・市民公開講座の開催協議及び運営
・卓話の講師の選任及び運営
・「後援名義使用申請」及び「助成金交付申請」の審査

平成28年度　函館文化会　収支計算書

（単位：円）

科目	予算現額	決算額	対予算比	備考
Ⅰ　事業活動収支の部				
1　事業活動収入				
基本財産運用収入	5,662,000	5,921,310	△ 259,310	
会費収入	194,000	194,000	0	
事業収入	14,000	14,400	△ 400	
寄付金収入	1,000	0	1,000	
雑収入	30,000	30,666	△ 666	
事業活動収入計	5,901,000	6,160,376	△ 259,376	
2　事業活動支出				
(1) 事業費支出	4,157,000	4,148,777	8,223	
①文化振興事業	2,906,000	2,907,708	△ 1,708	
事務手当	1,374,000	1,374,000	0	
顕彰費	100,000	100,000	0	
会議費	400,000	399,638	362	
旅費交通費	150,000	147,520	2,480	
通信運搬費	80,000	76,975	3,025	
什器備品費	10,000	0	10,000	
消耗品費	67,000	63,100	3,900	
修理修繕費	10,000	0	10,000	
印刷製本費	250,000	276,584	△ 26,584	
委託料	35,000	35,000	0	
賃借料	90,000	86,940	3,060	
諸謝金	80,000	77,959	2,041	
助成金	50,000	50,000	0	
負担金	90,000	89,500	500	
雑費	120,000	130,492	△ 10,492	
②土地賃貸事業	1,251,000	1,241,069	9,931	
事務手当	225,000	225,000	0	
通信運搬費	9,000	8,526	474	
駐車場造成工事費	153,000	152,712	288	
租税公課	753,000	752,500	500	
委託料	41,000	40,320	680	
振替手数料	60,000	59,820	180	
雑費	10,000	2,191	7,809	
(2) 管理費支出	1,896,000	1,846,274	49,726	
事務手当	715,000	713,763	1,237	
退職手当	130,000	130,000	0	
会議費	100,000	105,208	△ 5,208	
旅費交通費	120,000	104,810	15,190	
通信運搬費	130,000	119,807	10,193	
什器備品費	124,000	122,377	1,623	
消耗品費	47,000	59,570	△ 12,570	
修理修繕費	10,000	0	10,000	
印刷製本費	10,000	1,944	8,056	
委託料	162,000	161,839	161	
賃借料	185,000	184,420	580	
租税公課	103,000	102,400	600	
負担金	10,000	5,000	5,000	
雑費	50,000	35,136	14,864	
事業活動支出計	6,053,000	5,995,051	57,949	
事業活動収支差額	△ 152,000	165,325	△ 317,325	
Ⅱ　投資活動収支の部				
1　投資活動収入				
特定預金取崩収入	430,000	430,000	0	
神山茂顕彰積立金取崩収入	200,000	200,000	0	
郷土資料等整備積立金取崩収入	100,000	100,000	0	
退職給与引当金取崩収入	130,000	130,000	0	
特定預金借受収入	400,000	400,000	0	
郷土資料等整備積立金借受収入	400,000	400,000	0	
投資活動収入計	830,000	830,000	0	
2　投資活動支出				
特定預金繰入支出	300,000	300,000	0	
郷土資料等整備積立金繰入支出	200,000	200,000	0	
退職給与引当金繰入支出	100,000	100,000	0	
特定預金返済支出	400,000	400,000	0	
郷土資料等整備積立金返済支出	400,000	400,000	0	
投資活動支出計	700,000	700,000	0	
投資活動収支差額	130,000	130,000	0	
Ⅲ　予備費支出	50,000	0	50,000	
当期収支差額	28,000	295,325	△ 267,325	
前期繰越収支差額	287,000	287,050	△ 50	
次期繰越収支差額	315,000	582,375	△ 267,375	

〈注記事項〉

- 「予算現額」は、第６回理事会において議決された補正後の額である。
- 投資活動収支の部　　特定預金取崩収入は、次のとおりである。「神山茂顕彰積立金取崩収入」は、「同積立金のうち200,000円」を取崩し、「事業活動収支の部　事業活動支出　事業費支出　文化振興事業　顕彰費に 100,000円、贈呈式関係経費に 100,000円」に「郷土資料等整備積立金取崩収入」は、「同積立金のうち 100,000円」を取崩し会報発行等経費に「退職給与引当金取崩収入」は、「同積立金のうち 130,000円」を取崩し、「事業活動収支の部　事業活動支出　管理費支出　退職手当」に130,000円を充てたものである。
- 投資活動収支の部　　特定預金繰入支出は、次のとおりである。「郷土資料等整備積立金繰入支出」は、財政調整資金として200,000円を、また、「退職給与引当金繰入支出」は、退職手当支給に備え100,000円をそれぞれ積み立てるものである。

一般社団法人　函館文化会　会員

（平成29年10月１日現在）

（ア）
秋保　榮
秋山　平
東　伸江
厚谷　享子

（イ）
池上　信廣
池見　厚一
石井　直樹
石田　恒彦
伊藤　皋

（ウ）
上田　昌昭

（エ）
繪面　和子
遠藤　正夫

（オ）
近江　茂樹
近江　幸雄
大島　安長
大瀧　俊征
岡田　弘子
小笠原　金哉
小笠原　孝
小笠原　愈
沖野　信治
小山内　武弘
落合　治彦
落合　良治
小野沢　猛史
小原　幸男

（カ）
貝森　とも子
葛西　善一郎
梶原　佑倖
加藤　清郎
加藤　栄子
金山　正智
叶　邦武
叶　加奈子

（キ）
北原　善通
杵屋　勝幸恵
木村　裕俊

（ク）
工藤　亜也子

（コ）
荒到　夢形
小林　明
小林　裕幸
駒井　惇助
小柳　辰夫
今　千尋
近谷　忠衛

（サ）
櫻井　健治
佐々木　馨
佐々木　俊克
佐藤　公郎
里見　泰彦
佐野　史人
澤田　美千

（シ）
島津　彰

（ス）
末永　玲子
菅野　剛造
須藤　由司
澄　信一

（タ）
田井中　和子
平　昭世
髙市　道也
高田　達也
高橋　勇
太刀川　善一
辰村　和子
谷村　誠
田村　志朗

（チ）
千葉　軒岳

（ツ）
辻　喜久子
土家　康宏
坪山　元彦

（ト）
富田　秀嗣

（ナ）
中尾　仁彦
中野　晋
中野　達弥
中村　朝山
夏井　紀男

（ニ）
西澤　勝郎
丹羽　秀人

（ネ）
根津　静江

（ノ）
信田　利之
野又　肇

（ハ）
橋田　恭一
花野　芳枝
浜谷内　節子
原　眞人

（ヒ）
平野　利明
平原　康宏

（フ）
福原　至
藤井　方雄
藤井　良江
札内　征男
船矢　美幸
古野　柳太郎

（マ）
松崎　満洲夫
松崎　水穂
松村　隆
松谷　勇
丸藤　競

（ミ）
三浦　稔
宮崎　昌

（ム）
向出　悦子
向出　清治
棟方　次郎
村上　英彦

（モ）
毛利　悦子

（ヤ）
安島　進
山田　涼子
山那　順一

（ヨ）
横井　由利子

（ワ）
若柳　英美代
若山　直
渡邉　兼一
渡利　正義

（以上１１３名）

編集後記

◇「函館文化会・会報」第79号をお届けいたします。今回も「会員に読まれる会報」、「会員が参加する会報」を目指して編集に取り組みました。読み応えのある会報が出来たと自負しておりますが、ご一読いただきご意見・ご感想をお寄せ下さい。

◇今号でも神山茂賞受賞記念講演会、文化会講演会、市民公開講座、卓話の概要を講演録から纏め掲載いたしました。ページの制約もあり講師の先生方には何度となく手を加えていただくなどご苦労をお掛けしてしまいましたが、改めて感謝申し上げます。

◇特集「函館の歴史と文化を語り継ぐ」…。第２回目のテーマ「函館の坂道」に５人の皆さんから思いやエピソードを寄せていただきました。読みながら、冬の坂道で「されよ～」と叫びながらソリや竹すべりをした記憶が蘇ってきます。冬の坂道は遊び場だったことを今の子ども達へ伝えておきたいものと感じたのですが…。

◇会員の島津　彰氏から「手話の源流の修道院手話」の寄稿をいただき、興味深く読ませていただきました。ありがとうございます。これからも、郷土にまつわる歴史や文化について、会員皆さんからの投稿を期待しております。

◇本日現在の会員数は113名、遂に100人の大台に乗りました。単に会員が多ければよいということではありませんが、函館文化会の活動に賛同いただける方を一人でも多くという思いです。引き続き会員増強にご協力下さい。（編集子）